
クレヨンに願いよ

Okina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレヨンに願いよ

【Nコード】

N5005S

【作者名】

Okina

【あらすじ】

春には出会いが待っている。

一年の時にはなかったが、この二年からは素敵な出会いと恋愛がしたいと淡く期待を抱いていた。

そんな中、隣の席の「桜井美穂」に一目惚れをし、それと同時にちよつと怖い美穂の友達「村山夏希」と出会う。

何が起こるかわからない新学年生活がこんな展開が待っているなんて!?

『「春」それは出会いの季節』

桜が咲いての新学期。そんな漫画などに出てくるほど、桜前線が進んでいない。まだまだ、冬の寒さが残っており、ブレザーの中にはカーディガンを着ているやつもまだまだ多い。

冬の寒さから春に近づくにつれ、草木は緑を覆い、冷たい風は徐々に温かみのある風が変わってきている。さすがに雪が降るといってもなくなり、除雪車が固めた雪の山は、太陽の光を浴びて少しずつ小さく解けていく。

春が近づいてきて俺はウキウキしている。それは、寒くて仕方がない季節が終わり、これから暖かくなっていくんだと思う、春を待ちわびている自分と、新学期になり、新生活が始まるこれからの期待に胸がいっぱいだからだ。一年の時は、人見知りもあつてか、なかなかクラスに馴染めず、最初の頃は恥ずかしながらも友達作りには苦労した。ゴールデンウィーク前には何とか話したり、飯を一緒に食べるような友達と巡り合え、ゴールデンウィークには友達と過ごすこともできた。

一年の時は慣れない環境もあつて苦労もあつたけれども、今年は違う。クラス替えがあつて最初は苦労するかもしれないが逆にそれがまた楽しみでもあるのだ。今年は去年とは違い自分自身、余裕がある。それはきつと一年の時に少し苦労を知った恩恵だろう。だから、今はこの新学年というのがすごく楽しみなのだ。

春休みが終わり、少し休み明けでだるい気持ちもあるが新学年になる期待を胸に乗せて、白御飯とベーコンエッグをむしゃむしゃとかつ込み、麦茶で喉を潤す。うん、よし今日から頑張ろう！

そもそも、新学年になることで胸が膨らむには最大の理由がある。それは恋愛だ。一年の時は余裕がなくてそんなこと考えてられなかったけれども、俺自身、高校生なわけで、やっぱり素敵な恋愛を夢

見てしまう。ただそれを夢にはしたくなくて、高校時代ぐらい恋愛をしてみたい。過去に恋愛がしたことがないということではないのだが、恋愛が成就したことがない。そう、まだ交際までではしたことがないのだ。よく漫画なんかでも学園恋愛のものが溢れてるけど、そんな夢みたいなことをしてみたいものだ。この高校生活には。そして、この新学年になったからには、先輩あり、後輩あり、新クラスありと、どこから恋愛に発展するかわからないこの設定が漫画の読みすぎか、すごく期待してしまっている。そのためにはまず、普通に女子と話ができるようにならないといけないのだが・・・

期待を胸に、少し新学年ということもあり僅かながら緊張しながらも、学校にたどり着いた。二年に進級すると、クラス替えがありまた、友達作りに苦労してしまいそうだ。

新クラスの組み合わせは下駄箱前の正門の所にクラス替えの結果が張り出されていた。クラス替えの確認表は、まずは自分の一年の時のクラス表を見て、名前の脇にあるクラス名が新クラスというわけだ。そこで新クラスがわかったら新クラスの表をしてみる。そこでどんな人と同じクラスになれたかわかるという仕組みだ。

「ええーつと黒木、黒木つと…C組か」

俺はC組ということだった。そこで誰と一緒に、仲が一緒だったやつと一緒にだといいのだが…

そんな集中しきっている俺に、ポンツと肩を叩かれた。一体誰だと思っその場で振り返った。

「おお！優也、おはよう！」

こいつは寺尾卓也。一年の時に苦労して手に入れた友達だ。真面目でしっかりしていて野球部に所属しているスポーツマンだ。

「ああおはよう。卓也は何組だった？」

「俺はC組だったけど優也は？」

「マジ？俺もなんだけど！やったな！慣れ親しんでるやつがいると助かるぜ」

「そうだな。これで席も近くになれたら最高だな！」

キーン コーン コーン コーン…

話し込んでいたらいつのまにか朝礼の時間だ！

「やべ！早く教室行こうぜ！C組だったな！」

「よし、行こう！俺達の明るい学園生活へ！！」

廊下は走るな。というけれども走らずにはいかない。新学年早々に遅刻とかなり目立つからな。

廊下で何人もの生徒にぶつかりそうにもなったがなんとか二年C組に到着した。

「ふう、何とか間に合ったか。担任の先生はまだ来ていないみたいだぜ」

「はあはあ、優也は足が速いな・・・付いていくのが精一杯だ・・・」

「おいおいおまえは野球部だぞ。帰宅部に負けてどうする」

ガラガラ・・・教室のドアを開けて担任の先生がやってきた。今年入ってきたばかりの先生なのか、少したどたどしい。若いし。

「みなさん、初めまして。今年からこのクラスの担任になりました、高橋聖子と申します。今年就任したばかりで、まだまだわからないこともありますが、みなさんでこの2年C組を作っていきましょう。」

朝の朝礼が終わり、適当に割り振られた席順だったこの席もくじ引きで再抽選をすることになった。俺としては後方の列で窓際がいいと思っていたが、さて、俺のくじ運はいかに・・・

「…キター！希望通り！」

希望通りの席をゲットした！寺尾は俺の席よりそう遠くもないが、割と前列のほうだった。

俺は席を移動して、机の脇のフックにかばんをかけていた。

「隣よろしくね！」

唐突だった。隣の女の子が話しかけてくれた。

「ああ…こちらこそよろしく…」

あまりに唐突だったので気の聞いた声をかけられなかった。それに…

「あ、私ね、桜井美穂っていうの。よろしくね！」

「おおう、俺は黒木優也。…よろしくな」

その子はセミロングのヘアスタイル、とても元気が良く爽やかなイメージ。笑顔もとても可愛い子だった。第一印象から言って俺の好みのタイプだった。これは…最高のスタートだ！！好みの子がなんと積極的に話しかけてくれて、それに隣の席！！そしてなんといつでも可愛い…

浮かれモードだった俺に冷酷な矢が突き刺さった。

「ねえ、あんた、椅子がガツガツ机に当たってるんだけど！！」

え？ 桜井さん？ いや、彼女の顔は「？」マークだ。後ろ…か？俺の席は後方ではあったが最終列ではなかった。なので後ろにも席があったのだ。そこには頬杖をしてこちらを睨み付けている女の子がいた。

「後ろにも人が居るんだから気をつけなさいよね」

「あ、ああごめんな…」

「あたし、村山夏希。あんたは？」

「ああ、俺は黒木優也。よ、よろしく…」

最高のスタートを切ったわけだがちょっと怖い思いもした。そんな瞬間だった。あまり浮かれるな、気をつけるというサインなのだろうか…

この夏希という子も怖いイメージだが見た目は美穂さんに匹敵するほど可愛い顔立ちだ。顔はとても小さく髪の毛も腰につくくらいロングヘアで見た目だけでも男子から声をかけられてもおかしく

ないぐらいだ。

「美穂と席が近くてよかったあ！新しいクラスで話す人いなかったらどうしようか心配だったんだあ」

「私もだよ！よかったあ夏希と一緒に！」

ほほう、友達同士だったのか。ちよつと間に挟んで話されていてちよつとまいったな。でも、美穂さんと仲良くなるにはこの夏希って子とも仲良くならなきゃならないんだよな…ちよつとこええけど！

そんなこんなで始業式である一日が終わり、卓也と途中まで一緒に帰ることになった。俺は徒歩で通える範囲だけど卓也は途中まで一緒に帰り途中からはバスで帰るルートだ。

「んじゃあまた明日！」

「おう！」

卓也と別れたあと、携帯いじりながら帰っていたところ、またしてもあの女の声が聞こえた。

「ねえ…あんだ」

「ん?? なんだ??」

「なんで、あたしについてくるわけ？」

「はい?? いや、俺も帰りこつちなんだけど…」

「そつ わかったわ」

…なんなんだこの女…俺があとをつけてるわけないだろう。俺だつて帰り道こつちなんだ。

そのあとしばらくしたあと、またしても夏希が話しかけてきた。

「ねえ…あんだほんとにこつちが帰り道なわけ？」

「いや、だからそうだって言ったじゃないか」

「……」

またしても聞かれた。別に俺は嘘をついてるわけでもなく、もちろんストーキングをしてるわけでもない。本当にこつちが帰り道なん

だ。

そんなこんなで自宅に帰ってきたが、なんだか一日いろいろありすぎて疲れたな…

帰ってきて制服を脱いで昼寝のために、二階にある自分の部屋へ。夕方から自分の部屋に行くのは実に珍しい。ほとんどはリビングに居て、ほぼ寝るだけの部屋なのだから。

ふあ〜とあくびをして夕日が差し込むカーテンを閉めようとしたとき、俺の部屋から向かいの部屋のカーテンが開いていた。

そしたら、これから着替えを始めようとした人とバツタリ目が合ってしまった。

なんで？ そんな？ ばかな？ と思った…それもまた運が悪く、夏希だったのだ。

俺の部屋は家の通りからは反対側になるので俺の部屋の窓からは後ろの家が見える。すぐ側に家があるわけで景色が良いわけでもない。のであまり部屋の窓からの景色を気にしたことがない。それにこの時間帯に部屋に行くのも俺自身とても珍しい。そのためか、後ろの家が誰の家か、ましてや、同じ学校の学生が住んでいることすら俺は知らなかった。

夏希はブレザーを脱ぎ、リボンはずして、ブラウスの第一ボタンをはずし、第二ボタンをはずそうとしたところではったりと目が会ってしまったわけだから、正確には下着姿を見てしまったとかではないのだ。だが、夏希は赤面し、ちよつと間が空いた後、ぱつとカーテンを閉めた。まあ見られちゃ悪ければカーテンを閉めときゃいいんだけどな。

そしてちよつとしてすぐ、ピンポンピンポンと、チャイムが鳴った。

誰だかわかる。きつと夏希だろう。

ドカドカと階段を下り、俺は玄関のドアを開けた。

期待は裏切らず、目の前には夏希がいた。

「ねえちよつとー！！あんだなんなわけ？今日の初対面に、尾行に部

「屋の覗きまで!!」

「いや、ちよつと待て。机が当たってしまったのはわざじゃないし、悪かったよ。けどさつきも言ったとおり帰り道が一緒だった訳で尾行でもないし、それと覗き…て言っても覗きじゃない!開いているカーテンを閉めようとかだけなんだ!それに見られちゃいけないならカーテンを閉めておけ!」

「言い訳は無用よ!んゝなんだか頭にきたわ…」

「俺は別に言い訳はしていない。全部正論だろ」

「あんたが正論って言ってもこっちは被害者なわけ!とりあえず、危害を加えたのはあんたなんだからまず謝りなさいよね!」

「なんで俺がこんな言われなきゃならないんだ。それにこっちが言ってる事ちゃんと聞いてるのか?でも、面倒事は嫌だったのでここは俺が謝って済ませようと思った。」

「…悪かったよ」

「…たく!最初からそう言えば良いのよ!」

ズンズンとご立腹の様子で夏希は帰っていった。

「…たく…なんて一日だ…」

ボリボリ頭を掻きながら自室へ戻っていく。クタクタになり、ベッドに横になった。

隣の席があんな可愛い子で浮かれていて最高のスタートを切ったと思ったが、それでもなかつたみたいだな。運を一気に使って一気に不運が舞い降りてしまったぜ……

って言うか、家の裏が夏希の家って…地元が一緒ということは、夏希って俺と同じ中学か?あんなやつ見た事ないけど…

次の日、勉強はだるかったが、隣の席である桜井さんとちよこちよこ話したり、その中で夏希も混ざって話したりと退屈しない授業を送っていた。

なぜ昨日あんなゴタゴタがあったのに夏希と普通に話せているの

か…これは俺もわからない。けどなんだか昨日の件は終わったのか？ 夏希は普通に話しかけてくれている。

「美穂つてさあホント可愛い物好きだよね！シャーペンとかキヤラクター物ばっかりだし」

「だって勉強の時とか癒されるんだよぉ〜！夏希も使っちゃいなよぉ」

「ええ〜確かに可愛いけど…ちょっと邪魔かも」

夏希つて昨日のこともあるけど、自分の思ったこととか結構ストリートだよなあ…それにしても親しいせい？なのか、桜井さんと話している時はなんか普通だよな？俺にあんな感じで喋りかけるのは単に昨日の行動が原因？それとも俺のことが嫌い？？

「そういえば、夏希つて俺と家近所だったんだな。知らなかったぜ」

「知らないのも当然よ。だって春休みに引越してきたんだもん。」

一人暮らしを始めてみたの。」

「そうだったのか。どおりで知らないわけだ」

「前はだいぶ遠くから通ってきていたからね。今は近所の学校ですごく楽だわ」

家の後ろであれば通りが別なので回覧板なども回らないのでわからないのだ。路地をくるつと回って行く形になる。もしくは家の裏にある柵をまたげば簡単に行けるのだが。

「それがどうかした？」

「いや、別に…」

キーンコーンカーンコーン……

午前の授業が終わって昼飯の時間になった。

まだ全体的に親しい友人が少ないということもあって席が近い者同士で食べる事になった。

俺は母ちゃんの握ったおにぎりとコンビニで買ったおかず。からあげ等肉系が多い。

どうして女子は小さくて可愛い弁当なんだろう。美穂さんは雑貨屋さんで売っているようなパステルカラーの可愛いランチボックスだった。しかし夏希はというと味噌汁も持ち込めるようなゴツい弁当箱だった。

「なあ夏希の弁当は、その、すごいよな」

「この方がバランスの取れる食事が取れるのよ！」

「んまあ確かに。そんだけ食ってもよく太らないよな」

「一様カロリー気にしたメニューにしてるし。それに味噌汁はダイエット効果もあるみたい。前にワイドショーでやってた」

ワイドショーのネタか。根拠はあるのだろうか。

「毎日手作りって…大変じゃないのか？」

「平気だよ。夕飯の残りとかをそのまま入れたりしちゃうけど作るの楽しいし！」

「すごいよなあ。俺なんかコンビニ頼りだから反省するよ」

「優也君も今度やってみたら？楽しいよ」

「そうだな。気が向いたらやってみようかな」

「うん。きつと楽しいから」

ホントは美穂さんが作ってきてくれると嬉しいんだけど、そんな事言えるわけがない。漫画みたいに作ってくれば良いのになあ。作ってくれるにしても今の関係じゃダメだよな。隣の席で昼飯をこつやって食べるのが精一杯。もっと頑張ってお近づきになりたいぜ。

午後の授業が始まった。

午後は飯を食った後と言う事もあって非常に眠い…

隣の席の美穂さんという。教科書を立てて担任に見られないように昼寝をしていた。

こつこつと見られていないようで実は見られていてバレバレなんだよなあ。

先生も分かっているながら声をかけないようだし。

それにしても…可愛い寝顔だなあ。隣の席で顔をこっちに向けているからだけど、本当にツイてるよなあ！

そんな風に思っていたら。

「黒木君！」

「あ、はい」

先生は起こすようアイコンタクトを送ってきた。

ちくしょーせつかくの天使の寝顔を…

俺は美穂さんの肩を叩き起こしてあげた。

「あ、しゅびません！」

寝起きで滑舌がおかしくなっていた。寝起きの声は可愛かった。

美穂さんは俺に小声でごめんとウインクをして舌をペロツと出して謝ってきた。

この子はなんでも可愛い。なんて神々しい…

そついえば起こす時にちよつとだけだけど美穂さんに触った。触っちゃったよ！もう今日は手を洗えない！

そんな気持ちを浸っていたら…首がちくつとした。

「だから、後ろにも席があるんだからガタガタさせないの！」

夏希はシャーペンの芯を少しだし、それを俺の首に向かって芯を折った。なかなかの勢いで芯が飛び首に直撃した。どんなことかわからない人は自分の腕にやってみよう。人には向けるな痛いから。

「イッテエ！悪かったな！」

どうやら俺は興奮すると椅子をガタガタして後ろの席の机が当たってしまうようだ。知らなかった癖だ。

気をつけなきゃまた夏希にやられるな…

そんなこんなで今日も一日が終わり、帰ることにした。

ここ、最近は夏希とは仲が悪いわけでもなく、帰り道も一緒に帰ることも多くなってきた。俺としてはできれば美穂さんと一緒に帰りたい。だが、帰り道が反対方向なのでそれは叶わぬ夢だ。叶えよう

とすればなぜ逆方向なのにこっちに？ってなってしまう。感づかれ
てしまうかもしれないのでそれは叶わぬ夢なのだ。

「ねえ優也」

「あん？ なんだよ」

「あんたって最近学校楽しい？」

「はあ？ 新しいクラスになったしそりゃ楽しいぜ！ なんだ？

楽しくないのか？」

「…楽しいに決まってるでしょうが!!」

なんなんだこいつは…何が言いたいんだ。

「あのね、そのね。恋しちやっただかもなの」

もじもじしながら夏希は言った。

「はあ？ またなんだよそりゃ。おまえってそんなキャラだったか
？ いったいどうした？」

「うるさいわね。まあいいや。なんだか嬉しくってどうだっていい
わ」

別に俺が聞くまでもなく夏希はベラベラ喋り始めた。

どうやらそいつはA組のやつらしい。一年の時も同じクラスじゃ
ないし俺の全く知らないやつだった。

「んで、そいつとはどんな風に知り合ったんだ？」

「彼とはまだ話したことがないの」

「ほ〜一目惚れかあ」

って一目惚れかよ。まだ話したこととかもないのに、恋って突然な
ものなんですかなあ。

「そ…んなどこかな」

「なあに照れてんだよ！ 似合わねえぞ！」

「あんたね…殴るわよ？」

「わあつたわあつた！」

一体誰だ？どんなヤツだ？夏希がこんな感じだもんな…なんだかす
つげえ気になるぞ！

「ああ〜早くまた彼に会いたいなあ〜」

「のろけてんじゃねえよ」

「なんとでも言え！」

人の事もそうだけど…俺ももっと進展したいなあ…美穂さんともつと話して…

「何を考えてんの？ ボケえつとしちゃって」

「ん？ ボケつとなんかしてえぞ！」

「あたしが注意しなかったらあんたは今頃、あの茶色い物体に足を踏み入れてるでしょうね。あたしに感謝しなさい！」

「おわっあ！！」

あと30センチと言ったところか…食事中にはお話しできないようなものが道路に！！

「たくこんなとこにさせるなよな！ ちゃんと処理しろ！」

そういえばここ最近席が近いからよく喋るし、帰りも一緒だからか…こいつと普通に話せてる。

こいつと普通に話せるのが嬉しいってわけじゃないが、なんだか新鮮な気がした。

そう、俺は基本的に男友達しかいなかったんだ。地元には友達がいとも全て男友達。

そのせいか、すごく新鮮に感じた。

いや、それとも、夏希を女として見ていないのか？確かにおしとやかではないので女の子らしいかと言ったら嘘になるし。

こんな事あいつに言えねえけどな…

なんかまた変な事考えてるんでしょ。みたいな目でこっちをジロツと睨まれてる…

こいつは人の心が読めるのか？ それとも俺が変な感じだったか？ 「ねえ変な事考えてるでしょ？ なに考えてたか言ってみなさいよ

！」

「いやあ？ なあんも考えてないぞ？」

「嘘おつきなさい！」

そういつてカバンを振りかざすと俺はとっさに危険を感知し、俺もカバンを盾にした

「う…お…何をするかっ!!！」

「なんかあんた見ててムカついたのよ」

「ムカついたら攻撃するの!?」

そういうとローキックを食らわせてきた。

ガードが完全に空いていて攻撃をもらに食らってしまう。こいつは、女の蹴りにしてはかなりの衝撃だ。

「これぐらいで勘弁してあげるわ。今は機嫌が良いの」

「たく…機嫌が良いのか悪いのか…それにしても夏希は獰猛なやつだ。」

ここは話の流れを変えよう。でないとな怪我するのは俺だ。

「なあ…おまえはその意中の人と結ばれる為にどんな工夫や作戦があるんだ？」

「そうねえ…ま、私には秘密のアイテムがあるからね！」

「んだ？ それは？ 秘密のアイテム？」

「そっ！ 秘密のアイテム！ 秘密だけどあんたには特別に教えてあげてもいいけどっ」

「はいはい、優しきお言葉ありがとうございますっ。んで？ どんなもんなんだ？」

「見て驚くなあ？ じゃじゃーん！」

そして夏希が取り出したものとは…クレヨンだった

なんの変哲もない12色入りのクレヨンで…そう、見た感じ普通のクレヨンだった。けれども近頃の女の子なせいかわかすは一般的な紙製のケースではなくプラケースに移され、ラインストーンで装飾がされていた。

「ええーつと夏希さん？ これはクレヨンですよ？ もしかしてお絵かきがお好きなのですか？」

「まあ一見ただのクレヨンよ。そこまでは認める。でもね、このクレヨンが普通のクレヨンとは違うというのはこの効果にあるの」

そういうと夏希はカバンからスケッチブックを取り出し、何やら絵を書き始めた。別に上手くはないが何を書いているかわかる。ヒマワリだ。

「ん？効果にあると言って絵を書くってどういうことだ？」

「よし、できた！ヒマワリ！」

そういうと、何もない土のところからニヨキニヨキと生えてきて、パツと花を咲かせた。

まだ春。そうヒマワリが花を咲かすにはまだちょっと早い。ヒマワリといたら夏だろ。やっぱ。

いやいや、そんな事はこの際どうだって良い！　つかなんで絵を描いたらヒマワリが！？　漫画じゃねえんだからさ！！　それとも俺がお疲れなのか？　五月病ってやつなのか？　なんで絵を描いたら？　絵を描いただけでヒマワリが？　夢なのか？　夢だよな？

「ううゝなんでえ…？」
「バタンツ…」

そこで俺はその場で倒れこんだらしく気がついたら家のベッドの上に横になっていた。

「う…あれ…？　なんでここに？　俺はたしか学校の帰り道に…」

「なあにビックリして倒れてるんだか。なっさけない」

「ああ、夏希か。もしかして俺は倒れて…おまえが運んできたのか？」

「うん、まあね！　私ちよつと力持ちだからさ！　でも家の近くでよかつたわ。さすがに遠ければ運んでこれないから」

俺と夏希の家は家の裏という事もありかなりの近所だ。倒れた事は災難だがこいつが近所で俺の家を知っていることはある意味不幸中の幸いだったのかもな。

そして倒れる前の事を思い返した。そうだ、クレヨンだ。

「なああのクレヨンだが、なんで絵を描いただけでそれが実現するんだ？　手品か？　マジックなのか？　ましては魔法か？」

「別にいゝ。そりゃあれを見たら最初はビックリするわ。私だって

最初は焦ったもの。手品でもマジックでもない。どちらかというところ魔法なのかな？ でもマジックも魔法か？ まあいいやこの際。このクレヨンは何、マジッククレヨンっていうの。」

なんだそのネーミングは…つかネーミングに「マジック」が入ってんぞ…

「それでね、これは描く人がその事を真剣に想いながら絵を描く事によって現実となるの。」

「まるで漫画だな。んでそんなもんどこで手に入れたんだ？ 前に住んでたところで手に入れたのか？」

「いえ、それはこつちに来てからよ。引越して来た時に自分の部屋に片付けをしていたの。その時に見つけたの」

「ほうまさに漫画的な発見だな。でもそんなのがあつたらまさになんでも叶えてしまうよなあ」

そういつた時に気づいた。こいつはまさかクレヨンを使って意中の人と…

「なあもしかしてそれを使ってその好きな人と…？」

「…そうよ」

「ってふざけんな！ そんなもん使って意中の人と結ばれて、おまえはそれで良いのかよ？」

「ちよつと、なによ？ いきなりキレイないでよ！ どんな方法でもいいでしょ！？ 私はどんな方法使ってもあの人を振り向かせたいの！ それがあんたに関係あるわけ！？」

言ったあとに気づいた。こいつにこんな事言つたら逆に火に油を注いでしまう事を。そして火中に粟を入れるように、こつちに跳ね返って来てしまうという事を。そうだ、ここは冷静にいこう。

「なあ…まだ何もつまづいたりもしてないんだろ？ ここはさ、もつと相手の事を知つたりしてみようぜ？ そうすれば相手の事をもつと好きになれるかもしれないし。それにまだ相手もおまえの事まだわからないだろうしさ。ここはもつとコミュニケーションをとってみようぜ」

「なんかあなたに主導権握られたみたいでムカつくけど、一理あるわ。そうね、コミュニケーション不足だしね」

よかった。わかってくれたか。こいつは思いこみであったりすることも多い。けれどちゃんと人の話を聞くこともできるやつなんだな。それにしてもそんなに夢中になるほど好きなんて…:…といつても一目惚れだろ？ それにメモメモになっちゃってなんかこいつには似合わないわねえな。キャラ的に。もし、俺が夏希の立場なら俺もクレヨンを使ってしまふのか？ …:…それはわからないけれどただ、一つ言えることはそれは間違ってるということだ。やっぱり恋愛と言うものはお互いのコミュニケーションや駆け引きみたいなものもあると思う。それを相手の気持ちを考えずクレヨンでコントロールするなんて…:…それはあんまりだよな。ここは、こいつが後々後悔や間違った事をしたりしないように、ご近所仲間の俺が注意してやらねえと…:…

『「春」それは出会いの季節』(後書き)

この度は「クレヨンに願ひよ」をお読み下さり誠にありがとうございます。
います。

誤字脱字があつた中お読みいただけただけことを感謝いたします。

今後はもっと面白い話しの展開、小説の書き方等勉強し、実践して
いきますのでまた次作をお楽しみにしていただければと思います。

まずは友達から

だんだん気温が上がってきてとうとうブレザーの下にセーターやカーディガンを着ている人がいなくなってきた。とうとうこの街にもやってきたのだ。桜前線が。

そんな時だった。部屋でベットに横になりながら雑誌を読んでいた時だった。パチンツパチンツと窓から聞きなれない音がしたのだ。いったいなんだと思い、カーテンを開けて外を眺めてみたらそこには銃を構えた少女が・・・というかエアガンでうちの窓を打っていた夏希の姿があった。

「おいおい、何やってんだよ!? ガラス割れたらどうすんだ!」

「大丈夫大丈夫。これ安物の弱いやつだから。」

これを読んでいる皆に言いたい。絶対するな! まあ誰もしないだろうけどさ。

つてか何で俺の部屋を打ってるんだ? そんな時夏希から紙ヒコーキが飛んできた。よくまあ無事に飛んでこれたもんだと感心しながらその紙ヒコーキを広げてみる。

「今からちよつとうちに来て! 話がある!」

どうやら呼び出しのようだ。なんだなんだ? 休みの日でも夏希と会うことになるなんて。男友達ならまだしも女友達からこんなこと・・・なかったかな。でも夏希だし、家が近所つつか、裏だし。とりあえずそんなことを思いながらも夏希の家に行くのだった。

ピンポン・・・ガチャ。

「どうぞ。あがって」

「おじゃましまーっす」

入ってみて、靴は少しバラバラになっていた、そして玄関からすぐが台所になっていた。そこではペットボトルはペットボトルという風に一様分別がされていた。アパートというものは実際この機会が初めてになるが、玄関のすぐそこには台所があつてなんだか不思議

な感じがした。こんなものかな?と思った。

リビングに入ってみると学習机のそこにはパソコンが一台置いており、その反対側にはベッドが置いてある。そのベッドの上にはなにやら可愛らしいぬいぐるみがあった。全体的に女の子という感じの可愛い部屋だが、床にはとても興味深い、虎のぬいぐるみがあった。ものすごくリアルティのあるぬいぐるみで場の雰囲気に合っていないかった。

「お、おい夏希。」

「ん?」

「このリアルな虎は何だ??ものすごく場の雰囲気をぶち壊しているのだが。」

「はあ?なあに言ってるの!?こんなに可愛いのに!この虎はね、ちなみに、リアルだよ。リ・ア・ル!」

「はあ?どどういうこっちゃ」

そんな時俺の背中を猫が自分の匂いをつけるように頭をこすり付けるような感触があった

「ん?おわああ!!なんだ?マジか!?なんで本物の虎が!??」

「大丈夫!本物の虎でも中身は猫と一緒にだから!それにとっても小さいでしょ?」

確かに大きさこそは猫より少し大きいぐらいで大きさの例えで言うのであれば犬が妥当な線であろう。サバンの番組で出てきているような大きさではない。ましてや、噛み付いたり引つかいたりなんて事はしてこない。っていうか、なんで日本に虎が飼われている!?テレビに出てくるような超有名人ならありえそうな話ではあるが夏希は見たところ普通の女子高校生だとは思いが。見たところぐらいは。

「あんたも気づいたと思うけど、これはマジックレヨンで描いたものなの。だから見た目も普通よりは小さめだと思っし中身も猫のようになっている。じゃないとこの部屋がサバンのなっちゃうわ」

「マジックレヨンかあ・・・なるほどな。いやあ未だに信じられない

い部分ではあるんだけどな。やっぱりこうやって目の辺りにすると驚いちゃうわ・・・」

「ふっふっくん。やっとあんたもこのクレヨンの凄さがわかってきたよね！」

「ああもう今回ので十分でぐらいにな。それにしても本当に大丈夫か？この虎は？ある日突然“村山夏希”虎に食われて死亡・・・なんてならないよな・・・？」

「はあ？バツカじゃないの！？そんなわけないでしょ？言うておくけど中身は猫なんだから食われることはまずないわよ！」

「大丈夫なら良いけどさ。で、なんなんだ？俺をここに呼び出した理由って？まさかその虎を見せようとして？」

「虎に関しては少なからずあるわ。今日ここに呼び出したのはクレヨンの事について話がしたかったのよ。クレヨンの事は私が調子に乗っちゃったせいか、あんたに喋っちゃったし。単刀直入に言えばこの事は誰にも喋らないで欲しいの。」

「まあ別に良いけどさ。もし仮に喋ったとしてもなかなか人は信じちゃくれないだろうしな。でもよ、俺以外にこの部屋に来た人はどうするんだ？その虎。明らかにおかしいだろ？」

「そこに関しては大丈夫！転ばぬ先の杖というか暗示をかけておいてね、私がニャーニャーっていうと、猫の姿になってね、ガルルっていうと虎の姿に戻るの。だから緊急時にはこの方法を使うの。」

「ほくう。なかなかおまえは頭が回るんだな。」

「なによ、その上から視線は。」

「いや、特に上から見ているつもりはないのだが。」

そんなマジックレヨンについての話をしていたところ、夏希はグラス二個とコーラのボトルを持ってきてくれた。

「おおサンキュ！」

「ちよつと待ったあ！！！」

「おおっいきなりなんだ！？」

「これを飲ませてあげる代わりにもうひとつ話を聞いて！」

「ああ？なんだよ？そんな交換条件出さなくても話ぐらい聞いてやるっつーの。」

「前にちよつと話をした片思いの人の話についてなんだけどね。その・・・どうやって近づいていけばいいかわからなくて・・・」
「話したこともないんだっけ？」

「うん・・・」

「じゃあまずは話してみることだな。人対人だ。言葉というコミュニケーションを取らないと何もわからんし変わらん。」

「それじゃあどういう風に話せば良いか一緒に考えてよ。」

「ん〜そうだなあ・・・ん〜・・・情報が少なすぎてシミュレーションができません。その人について何か知っていることはないのか？」

「えっと、その人はA組の大山ウィンスキー君とってハーフなんだって。喋った事はないけれど身長は190センチ位あって髪は黒いけど鼻とか超スツとしていて高いし、かつこいいんだあ！」

「おいおい俺は別におまえののろけ話を聞いているわけじゃねえんだぞ。」

「うっさいわねえ。で、どう？シミュレーション立てれそう？」

「ん〜そうだなあ・・・聞くところによるとかなり目立ちまくりのモテまくりな感じだなあ。そんなやつに彼女がいなくても限らないなあ・・・」

「うん・・・そうだよね・・・」

「まあそうと決まったわけでもないし、それを調べるのも第一歩みたいなものだろ？人の噂話もこれから聞けるかもしれないしよ！」

「うん・・・そうね。まずは話してみないと！じゃあ早くシミュレーションしてよー！」

「ん〜こいつは完全に人任せだな。仕方ない乗りかかった船だ。協力してやるか。」

「じゃあまず。基本は挨拶ということ、朝会ったらまずは挨拶だ！」

「え〜それだけ？」

「実践するのはおまえだぞ？まずはこの挨拶自体できるのか？」

「バツカにしないでよ！？当たり前じゃない！できるに決まってるじゃん！」

「じゃあまずはそこまでやってみよう。その次はまた考えてみよう。」

「わかった！よし待つてる！ウインスキー君！」

「気合が入ったみたいだな。でもこいつの恋愛相談を受けるついでに俺の恋愛相談もできれば受けてもらいたいところだが・・・まあまあにしようか」

「もう昼近い。せっかく夏希に会っているんだ。この相談をしたらおしまい。っていうのはなんか寂しすぎるだろう。せっかくだから一緒に飯でも食おうか。」

「なあ夏希。もう昼だしさ、飯でも食わないか？」

「ご飯？ん？あたしと食べたいのお？」

「別にそんなんじゃないやねえけどさ。せっかくこうやって会っている訳だしさ」

「うっわあ冷たい回答ですこと！あいにくね、美穂とこれから遊びに行く予定だから！」

「まじで！？うわあ俺も行ってえよ！」

「ん？何？その食いつき！？もしかしてあんた美穂のこと狙っているの？？」

「え・・・いやあ・・・そんなわけじゃ・・・」

「やっべえばれてしまった？？でも、待てよ？このままバレてしまったほうが相談にも乗ってもらえるのかもしれないしな・・・それなら今言ってしまったほうがいいのかもしれないな。」

「いや、そう・・・だよ。俺は美穂さんのことが好き・・・なのかもしれない！」

「うわっマジで！？あんたなんか？」

「・・・くっそあ・・・おまえだっけかなり理想の高いやつじゃねえかよ！」

「まあそういうなら連れて行ってもいいけど？連れて行かないと得意のストーリーキングが始まりそうだし・・・あ、でも美穂が良いって言ったらだからね!？」

そう言つて夏希は美穂さんに電話をかけた。

トウルートウル・・・トウルートウル・・・

「あれ？美穂出ないなあ？何やってんだろ？いやあこのままだとあんた来れないわね。残念」

「マジかあ・・・それは期待した分だけあつてショックだぜ・・・たとえば、交渉に成功したら行けるということになっていたが、俺は結構お前に期待してたんだぜ。きつと俺の為に交渉を上手くやつてくれると・・・」

「はあ？なあに勝手にあたしに期待しちゃってるわけ？わかった！こうしよう！もし、交渉に成功してあんたを連れて行けることになったら学校で豆乳ドリンクを一週間おごりね！」

夏希はまたもテレビの番組の影響なのか、今度は豆乳にハマっているらしいのだ。それもコーヒー味。俺もそれは飲んだことがあるがあれはコーヒーの味に近づけたコーヒー風味ってやつだ。コーヒー味とは断じて認めん。異論は求めない。

「一週間おごり？えーっと一日一本でいいんだよな？」

「そんな毎日飲んでいたら逆に太ってしまうわ。一日一本食事後が良いらしいのよ。」

一日一本。ということはこの豆乳ドリンクは100円だから、んで学校は平日のみの5日制。ということは500円か。500円で美穂さんと休日にも会える。それはやっぱり安いよな。

「いいぜ。その交渉乗ったぜ！」

「よおし！じゃあちよつと待ってて」

そういつてスケッチブックと派手なケースを取り出して絵を描き始めた。そう、マジッククレヨンだ。前回恋愛の話をしていてそんな使い方をすると説教を試みたものの、自分の立場になると少し違うよな。でも、前回の話に比べるとこっちは食事に俺が着いていく

ということだけ。つまり、飯は食っても後は俺の努力次第ということだ。ならばいいだろう。決して自分には甘いということではない、ケースバイケースというべきか。まあそんなところだ。

夏希はスケッチブックの絵を徐々に進めていた。ここまで来ればもうわかる。電話をして、そして、三人で飯を食う絵だ。

「よおし！できた！よおし、早速電話だ！」

トウルートウ！ 美穂さんが電話に出た。

「ごめんごめん、電話取れなかったね。ちょっと、お風呂掃除していたんだ！どうしたの？これから準備していく予定だったけど。」

「忙しいところごめんね！あのおさ、優也も行きたいみたいなの。ランチ一緒に連れて行っても大丈夫？」

「私は全然構わないよ！？人は多い分だけ楽しいしね！」

「ありがとう！じゃあまた1時に現地にね！」

「うん！わかった！」

プツツ・・・

「どう？これがあたしの実力よ。感謝しなさい！あんたも来れるようにしたから。これで豆乳一週間ね！」

「さすがだな。マジックレヨン！夏希、おまえには感謝しないとな！けどすごいのはこのクレヨンだぜ！」

「はあ？あんた何ナメたこと言っちゃってんの？この話なかったことにするよ！？」

「いやいや、冗談だから！取り消しは勘弁してくれ！！」

つたく、冗談が通じないなあ・・・でもこれでプライベートである休日にも美穂さんに会える！休日〓私服を拝めるわけだ。これはやばいな。本音で言えば記念に写真シールでも撮りたいところだがあいうのはほとんど撮るのは女の子だからさすがに俺の口からは言えないしなあ・・・しっかりと優也アイで録画しておかなければ・・・

「そつえばあんたジャージで行く気？まさかその格好のままで行くわけないでしょうね？だって美穂だよ？あんたの私服を今回見せ

ることになるのにそんなダツサイ青のジャージで行くわけ!？」

うっかりしていた。俺は美穂さんがどんな感じで着てくれるか楽しみにしていたのに、逆を言えば向こうにもこちらの姿を見せるわけだからな・・・落ち着け、落ち着け・・・

「そうだな! うっかりしていたわ。美穂さんがどんな服装で来るのか想像していたんだ。」

「何馬鹿なこと言ってるんだこのスケベ! わかったんならさっさと準備しろ!」

「じゃあまた着替えたら来るわ!」

さあて俺はどんな格好で行こうか・・・おしゃれな格好していきたいけど少しでもチョイスをミスればあつという間にダサい格好になってしまうしな・・・ここは普通より少しでも良い格好していい。

ちよつと春を感じる爽やかスタイル! ブラックのシャツの白い水玉模様。インナーは少し大人しめの黒いＴシャツ。パンツは少しタイトな濃紺のジーンズに黒いエンジニアブーツ。よし、これで行こう。これなら外れてしまうことはないだろう。

「よおおまたせえ! どうだ! ? きまつているかい! ?」

「ふん張り切ってくるほどすごいわけでもないのね。まあいいわ。その方がナチュラルでいいと思う。」

「おまえはなんだかヒヤヒヤする格好だな。」

夏希はモノトーン系のシンプルな服装で白いＴシャツに黒い段重ねになったミニスカート。その下にはニーソックス。確かに可愛い服装ではあるが、そのミニスカートは何だ? 学校で履いているスカートよりも少し短いではないか。これではパンツが見えてしまう。いや、別に俺は見たいわけではないけど・・・でも、やっぱり気になるっちゃうというか・・・見えたら見えたでラッキーというか・・・いやいやそうじゃない!

「は? 何がヒヤヒヤなのよ? ってか、どこ見てんの! ?」

バシッ！！

おいおいグーパンチはなしだろ・・・

「あいたた・・・何すんだよ!?」

「このスケベ野郎。あんたがヒヤヒヤしてたのはこのスカートでしょ!?でも残念でした!こういうのはちゃんと思えてしまったいいように下に別に履いてるの!短いスカートは可愛いけど見えたならダメでしょ!?だからちゃんと対策はしているの。あんたみたいなスケベ野郎がこの世界にはうじゃうじゃしているから。」

「そうなのか?なあんだ。その下に履いているものが見えてしまったらなんだかガツカリだな。男の代表として言わせてもらうと実にガツカリだ。」

「はあ?スケベ野郎を代表して言うてくれるの?ちゃんと訂正しておいてよね。ウインスキー君はそんな人じゃないわ。」

「まだ話したことないのによく言うぜ。男は見えたらそれはラッキィ。青春のページに刻まれるわけだ。」

「ハイハイ。もうあなたのスケベトークにはついていけない。もうすぐ出るからこんなくだらな話なんかしないで行く準備するよ。」

「おうよ。いやあ楽しみだなあ〜!」

あれ?予定時刻より少し早くついてしまったせいかな、まだ美穂さんは着ていない様だった。まあ女の身支度には時間がかかるということとは有名な話だからな。こういうところは男としてドシつと構えて待つわけだ。遅れてごめんねえって可愛い笑顔でやってきてくれるさ。

そんな時だった。黒い高級セダンらしき車が俺たちの前に止まって、運転手の人が出てきて後部座席のドアを開けた。そこからは高級黒塗りセダンとは少し合わないポップな服装の女の子が出てきた。そう、美穂さんだったのだ。

「遅くなつてごめんねえ!待ってたかな!」

「ううん、ちよつと前に着たばかりだから全然そんなことないよ！」
「優也君もごめんね！待たせちゃって！」

「いやいや、俺も夏希もさつき着たばかりだからさ！全然だよ。」
「そっか、よかつたあ」

「お嬢様、またお帰りの際はご連絡いただけますか？」

「わかつたわ！連絡する。」

「では、失礼致します。」

スーッと滑り出すような高級車特有の無音に近い静かな音で走って行った。

そんな所を俺は呆然とした顔で見ていた。

失礼に値するが、美穂さんはお嬢様だとは思わなかった。

だって漫画に出てくるようなお嬢様キャラではないし、変に気取った様子はなかつたし。

でもそれって、それが本当のお嬢様ってやつなのかな？

「ねえあんた、何さつきからアホヅラしてるわけ？美穂も来てるんだから！」

「お、おう！ごめんな、美穂さん！」

「え？全然気にしてないよ？だから気にしないでね。」

ああ・・・なんて優しいんだ！美穂さん・・・あなたはきつと天使の生まれ変わりなのでしょう・・・それとも、人間の世界に降り立った天使！？

「じゃあ、さつそく食べに行こっか？夏希の大好きなから揚げ井のお店！」

「え！？マジ！？あそこでいいの？やったあー！！ あ、あなたの意見は聞かないから。美穂がOKサイン出した以上、異論は求めません。」

「へいへい。異論はありません」

「私はから揚げ井好きだから良いけど優也君は問題なかつた？？」

「いやいや、俺もから揚げ好きだからさ！でも、から揚げ井。なんだろ？あんまり聞いたことないな。とりあえず飯にから揚げが乗っ

てるのか？」

「まあ。でもただ単にご飯にから揚げを乗つけたわけではないわ。楽しみにしてなさい！頼つぺたが落ちるから！」

そう言つて、夏希を先頭に俺たちは夏希の一押しの中から揚げ丼の店「with」と言う店へ向かった。

店はから揚げ丼というからにはすごく男の食事場という感じではなく、むしろお洒落な喫茶店のような感じだった。メインはやっぱり食事と言うことになるだろうが、女の子同士で来ているお客の中にはカフェだけを楽しんでいる人たちもいた。昭和の時代にはきつともつとあつたであろう、ステンドグラスがちよつとアンティークで光を差込んでキラキラと輝いていた。

このお店は先にオーダー制で先に席に座るのではなく、先にカウンターへ行き、メニューから選ぶ。

そのメニューの中はから揚げ丼が一押しらしく、色々なから揚げ丼があつた。

「ねえ優也。あんたはこのお店初めて？だったら最初はから揚げ丼マヨネーズがお勧めよ。それ以外にもおいしいのがあるけど、とりあえず初心者はこちらを食べておきなさい。」

「私もいつもから揚げ丼マヨネーズだよ。夏希がお勧めするだけあつて本当においしいから優也君も是非食べてみて」

俺はおろしポン酢のから揚げ丼と言いそうになつたが、夏希はこんなにウキウキしているからテンション下げたくないし、美穂さんまでお勧めするなら断る理由なんて一つもないだろう。

「そうだな！初めてつてこともあるし、俺もから揚げ丼マヨネーズにするよ！」

そう言つて三人で同じメニューを頼んだ後席に座つた。

「あ、私お冷持つてくるね！」

「いやいや、美穂さんは腰をかけて！そういうのは俺がやるからさー！」

「いいのいいの。まあまあ優也くんは座つててくださいな。」

「そっか、ごめんな。ありがとう。」

「ううん、待っててね。」

ここは男だったからお冷ぐらいみんなの分持っていくだろうって思っ
てしまっけれども、美穂さんがここまで言ってくれるんだ。ここは
しつこくせず、ご好意に甘えようと思った。

「なあ夏希。おまえも、美穂さんを見習え。あんなに優しい女の子
なかなかいないぞ。」

「うっさいわね、あんた恩忘れたわけじゃないでしょうね？」

「そんな怒ることじゃないだろ？」

「べ、別に怒ってるわけじゃないし！ただ、あんたがちょっと生意
気なだけ。」

「はいはいすいませんでしたー。」

っと平謝りをした。そんな時コップ3つに氷をしつかりと入れ、ち
よっとフラフラしながら歩いてきた。

そおーっとそおーっと歩いてきて、まず俺にお冷を渡そうと置いた
時、油断をしたのかコップを倒してしまった。俺はとっさにコップ
を立て直したがそれでも半分以上の水が俺の方へ流れてしまい、俺
は濡れてしまった。

「キヤツ！！ごめんね！ごめんね！今ハンカチで拭くから！！」

「いや、これぐらい大丈夫だよ！気にしないで！」

そう言っつて、美穂さんは涙目になって謝ってくれて、カバンからピ
ンクの水玉のハンカチを出し、俺に渡した。もし、これがマンガの
世界だったら美穂さんが拭いてくれるだろうけど、そこは配慮をし
て俺にハンカチを渡すだけだった。まあ拭いてくれたら拭いてくれ
たで恥ずかしいけどさ。

「本当にごめんね、優也君！！」

「良いつて良いつて。水だろ？そんなの乾いてしまえば跡形もない
んだからさ！気にしないで！」

「うん・・・ごめんね、ありがとう」

そんなやり取りをしていたら店員さんがやってきてお待ちかねのか

ら揚げ丼がやってきた。

そんな中、いただきます。も言わずに夏希が食い意地を張って電光石火の如く、箸を取り食いつき始めた。

「やっぱりこれよねえ〜！ほんつとにおいしい！！」

「夏希ったら。フフツじゃあ優也君。私達も食べよつか！」

「おう！」

そう言つて俺達も箸を取り、から揚げ丼に箸を伸ばす。俺はまずはこのメインであろう、から揚げをまず箸を取り、一口かじる様に食べ始めた。揚げたてがとてもジューシーでから揚げからは肉汁がジュワーと溢れ出し、口の中に広がってくる。そして、から揚げにかかっていた極細線のマヨネーズが絶妙にマツチしていたまらない。そこでご飯と一緒に頬張り、舌鼓を打つ。うん！これは確かに・・・いや、かなり美味しい！！夏希は良い舌してんな。確かにこの味はかなりB級グルメとしてはかなりの一品だ！

「いつ食べてもここから揚げ丼はおいしいね！」

そう言つて美穂さんも満足そうな様子だった。

俺は今思えばせっかく美穂さんところやっ一緒にいるのにも関わらずムシヤムシヤとから揚げ丼がつついていた。とてももつたいたい、せっかく休日に美穂さんと遊んでいるのに。

そうやっから揚げ丼を完食し、セットになっていた玉子スープを飲んだ。こちらはあっさりテイストで玉子だけではなく、ワカメや玉ねぎのスライスまでも入っていた。この味、この内容で600円とは・・・マスター、あんたはこの味で全国展開できるぜ。

「優也、あんたはご飯食べている時は全然喋らないのね。いつもは減らず口が止まらないってのに」

「一言余計だ。おまえだつて全然喋らないだろうが。」

俺も夏希も早食いで、食べている時は全然会話をしないで食べ終わつてから話し始めた。

美穂さんはどちらかという遅いほうでゆっくりと味を堪能しながら食べていた。先ほどお嬢様発覚事件以来、この方はどう見ても上

品に食べていてそれでいて味をしつかり堪能しているように見えた。
「ねえ美穂、優也！この後あそこの河川敷の桜を見に行かない!?」
「桜??桜前線は確かに来ている様だがこっちはもう咲いているのか?」

「は?あんたの目は節穴?それとも腐ってる?一回眼科行ったほうが良いよ。あんたの家の近所の公園の桜だってもう咲いているじゃない!!」

「え!?そうだったのか?知らなかったなあ。それなら散ってしまっ前に桜を拝みに行こうぜ!」

「私もまだ今年の桜は見ていないの!じゃあ河川敷を歩きながら桜を見よつか!」

「じゃあ決まりね!美穂が食べ終わったら早速行ってみましょ!」

そして、美穂さんが食べている間他愛もない話を夏希として美穂さんは食べ終わり、味の感想をそれぞれ述べ合い、夏希は得意そうな顔をしながら店を出てすぐの河川敷へ向かい始めた。

河川敷は結構広く作られており、芝生が敷かれていた。そこには子供たちがダンボールそりを楽しんでいた。

「今日は晴れていて気持ちがいいなあ!これなら桜も綺麗に見れそうだよ!」

「そうだね!晴れてよかったよ!優也君は桜好きなの?それとも花全般的に好き?」

「いや、好きって程でもないのだがやっぱり桜って寒い冬を乗り越えた後のご褒美と言うか春の訪れっていう感じがあつていいなあって思うよ!」

「そうなんだあ!私は桜って好きだなあ!なんだか基本的には白いんだけどさ、若干ピンクがかつていてたくさん咲いていると薄ピンクが際立って見えてなんだか可愛らしいんだ!」

「へえ!なんだか美穂さんを花で例えると桜って感じだな。理由はなかなか思い当たらないんだけどなんだかすごく似合ってる気がするよ。」

「ふえ！？そう・・・かなあ？花に例えられるのは初めてでなんだか恥ずかしいかなあ・・・」

「うわ！俺さつきなんて言っただんだ！？そんなに恥ずかしいことを言っってしまったのか・・・？それに気づかない俺ってなんだか恥ずかしい・・・！」

「ゲシッ！！そんな時夏希のローキックが入った！」

「つつう・・・いつもいきなり何すんだ！？」

「あんたがいつも隙だらけだからよ。それで？美穂が桜ならあたしはなんなの？？」

「あん？おまえか？そうだなあ～～～ヒマワリか？名前に「夏」って入ってるし。」

「それだけ？」

「ん～あとはいつも明るいからな！なんだかおまえに合ってる気がするよ。」

「うん！夏希はヒマワリって気がするなあ。私も思うよ。」

「じゃあ・・・ヒマワリってことで・・・」

「そういつて若干ではあるが夏希も少し恥ずかしそうにしていた。」

「んで、残るは俺なわけだが。俺は花に例えらしたら何だ？」

「ん？あんたが花？生意気言っってんじゃないわよ。どの花も合いません！」

「はあ！？なんだよおまえ！」

「つつさい！花になんか例えらんない！じゃあ竹！」

「た、竹だと・・・？花でもないし理由は何だ？理由は？」

「ない。適当に言っってみただけだから」

「なんだと！」

「あっはははははは！」

俺と夏希はいつものように言い合っていて、その光景を見ていた美穂さんは面白かったのか笑い始めた。その笑っている顔はとても可愛らしくて、憎たらしい夏希の事なんてすっ飛んでいった。

そうこうしているうちに桜並木に近づいてきた。少し強めな風が吹

き出すと桜の花びらがヒラヒラと舞っている。まるで俺たちを歓迎しているかのようにも思えた。

桜は少し花びらが落ち始めているような状態ではあったがその桜の花びらが舞う様子はただ木が立っていてそこに桜の花びらを咲かすただの桜に比べるとそれはとても綺麗だった。

その光景を見ていた夏希は散らないで！って言うような顔をしていて、美穂さんは桜を見て綺麗だなあと感動しているような顔だった。目を少し細めて桜の花びらが舞うところをじっと見つめていた。そんな美穂さんはとても可愛らしかった。このまま時が止まってくれば良いのにも思った。

「桜・・・綺麗だね・・・」

「ああすごく綺麗だ。ただ咲いているより少し風が吹いた時にヒラヒラと舞う方がずっと綺麗だ。」

「うん・・・そうだね。」

夕方になり、桜を見終わっての帰り道。美穂さんは車で来たため俺たちとお別れをし、俺と夏希で一緒に帰っていた。

「今日は本当に楽しかったぜ！美味しいものは食ったし、綺麗なものも見たし、美穂さんとも休日で遊んだし！文句なしの一日だったぜ！」

「それもこれも全部あたしのおかげよね！感謝しなさい！」

「ああ、こればかりは感謝してるぜ。ありがとな、夏希」

「え・・・なに素直になってるの？なんだか気持ち悪いんですけど！」

「気持ち悪いはないだろ！気持ち悪いは！」

「はあくあたしもウインスキー君にもっとお近づきになりたいなあ！」

「お近づきっていうより、おまえはまずは友達を目指せ！じゃないとさすがにうまくいかないだろ。」

「それはわかってるけど・・・どうやって友達になれば・・・友達

になってくださいなんていう馬鹿はいないだろうし……」

「まあそこは変にお願いするところじゃないだろ。友達つてのは恋人と違って自然となってるもんなんだよ。だからまずは話しかけてみたりしたらどうだ？」

「うん……そうだよ。あんたちよつとはマシなこと言うようになったじゃない！」

「俺はいつもと変わらんぞぉ〜！」

「じゃあこの後あたしのうちの前の自販機でジュース買って作戦会議ね！もちろんあんたのおごりで！」

「なあに言っただ。付き合っただやるのは俺のほうだぞ。」

「ケチ！わかつたわよ。」

そういつて俺はコーラを買って夏希はミルクティーを買って夏希家へ行った。

「第一次作戦会議を行う！テーマはどうやってウインスキー君と友達になれるかよ！」

「あ、明日の体育って確かA組と行動だったよな！夏希、おまえ運が良いぞ！明日会える機会があったじゃないか！」

「それは会えれば嬉しいけど、今はそれに満足してられないのよ。どうやってウインスキー君とお近づきになれるか。っじゃなくって！友達になれるかって言うのが重要なんだから！」

「じゃあ作戦を実行するならその体育の時間がカギを握ってるな！いきなり友達と言うのもなかなかハードル高いつてもんもあるからまずは話してみよう！」

「どうやって？」

「それをこれから考えるんだろう。そうだなあ〜体育が終わったあと、何か落とすとか？？」

「それを拾わせるってわけね！でもうまくいくかしら……」

「小さいものとかだとわかりづらいだろうな。ハンカチとかはどうだ？」

「ハンカチねえ……うまくいくかわからないけど、とりあえずは

やってみなきゃね！」

「おお前向きだなあ！じゃあ明日の体育はハンカチ落としちゃったわ作戦で行こう！」

我ながら思いつきで言った作戦にしては夏希を納得させたな・・・そうやって作戦がまとまってジューズも飲み終わったところで本日は解散することとなった。

俺は夕飯前に少し腹に残るようなものを飲んじまったことに多少後悔しつつ家へ帰るのであった。

翌日、学校に着き、教室に入ってみると夏希の姿があった。どうやらハンカチ作戦で使うハンカチに迷っている様子であった。

「おう！おはよう！なあにしてんだあ？」

「あ、あ・・・おはよう。今日ね、ハンカチの作戦あるじゃない？それに使うハンカチで迷っていたの・・・」

夏希は予想通り、作戦に使うハンカチで迷っているようだった。ハンカチは二つでどちらもシンプルな物で薄ピンクの物とレモンイエローの色をしたハンカチと二種類あった。

「この二つで迷ってるのか？どちらもシンプルだし目立ちやすそうな色だからどっちでもいいんじゃないのか？」

「あんまり女の子らしくないかもね・・・いつもはハンカチなんて使わないし携帯してないからハンカチなんてこの二つしかないのよで、この二つから選ぶわけなんだけど・・・それがすごく迷ってるの。だってある意味これがあたしの第一印象なんだから！」

「ま、まあそうだよな。でもどちらも変な色ではないし・・・うん・・・じゃあさ、おまえの今日の気分でしたらどうだ？そうすれば選びやすいんじゃないのか？」

「気分・・・気分ねえ・・・恋愛的な気分だからピンクかな！あ、でも、今日の朝の占い見たらラッキーカラーは黄色だったからやっぱり黄色にするわ！」

「ったくなんだよ。結局自分で考えて自分で解決かよ。」

こうやって作戦に使うハンカチはレモンイエローのハンカチに決まった。あとはどんな時に落とすかだ。

もちろん、そいつの目の前で落とさなければ気づいてくれないし、違うやつに拾われてしまったらご親切にありがとうでošimaiだ。つまりチャンスは一回。そして確実に成功させなければハンカチ作戦は失敗で終わってしまう。

「んで、これで色は決まったわけで、夏希はどうやって落とすのか決めたのか？」

「そうね、体育の授業が終わったら着替えに更衣室行くじゃない？その時彼の目の前を歩いてポツケからサツと落とすの。そうすれば後ろに歩いているウインスキー君は必ず拾うってわけ！これでどう！？？」

「そうだな。確かにこれが確実そうだな。じゃあこれでいってみよう。」

「心配だし、話すの緊張するけど、がんばらなきゃね！」

そして、体育の授業が始まった。

「あいつかぁ・・・やっぱりでかいな。ハーフだっけ？鼻も高いし、背も高いし、こりゃモテルわな・・・でもこれだけのやつだとモテルどころか彼女はいないのか・・・？」

体育の授業はバスケットで、正直俺はバスケットは苦手なほうだった。対戦相手はA組で、もちろんその中にはウインスキーがいた。やはり、背も高いし、バスケットをやらせてしまったらなかなかボールを取ることもできないし、ガンガンシュート入れてくる。他の人からのパスの受ける率も圧倒的だった。

見た目良し、スポーツ良し。これだけでも十分モテル。実に羨ましい限りだった。

結果的にはウインスキーの活躍もあってかA組の勝利にてバスケット試合は幕を閉じた。

体育の授業が終わり、とうとう作戦実行の時。

「なあ夏希、おまえ緊張してんだろ？ほら、リラックスしろよりラ

ツクス！」

「わ、わ、わかってるわよ！うつさいなあ〜！」

「ま、頑張れよ！あとはおまえ次第だからな！」

「うん・・・わかってる」

そして、生徒が更衣室に戻る時、夏希はしっかりとウインスキーの前をマークした。

そして、しばらく歩いて、まだウインスキーが後ろにいる事を見計らって・・・ぱつとハンカチを落とすした。

だが、その時だった。

「おい！ウインスキー！」

友達だろう。後ろから声がしたので当然ウインスキーが後ろを振り返ってしまったのだ。

当然ウインスキーの目の前に落とされた夏希のハンカチはウインスキーから拾ってもらえず、他のA組の女子が拾ってくれた。夏希はウインスキーが拾ってくれることを祈っていたが、それも叶わず、他の女子から拾ってもらったハンカチをただただ無言で受け取るのであった。夏希は立ち尽くしたままだった。こんなではまずいと思ひ、俺は夏希へと駆け寄る。

「おい、夏希、ドンマイだったな。うまく行ってたけど最後の最後で運が悪かったな。また次の作戦考えようぜ！」

「・・・はあ・・・悪いけど今は一人にしてくんない？」

「あ・・・ああわかった。すまん。」

あいつだいたいショツクだったみたいだな。真剣にハンカチの色まで考えていたんだもん。成功したことを前提に第一印象のことまで考えていたんだ。実行して結果が出るまでホント一瞬だし、ショツク受けるのもわからなくもないか・・・

今回の作戦は失敗に終わってしまったが、まだ一回目だ。まずは今回の作戦の反省。そして、夏希の心のケアっていうのは大げさかもしれないが愚痴でも何でも聞いてやることにしよう。

まずは友達から（後書き）

第二話が完成しました。

進展方法などを考えて行くと色々な方法があるなあと考えまして無駄に時間がかかってしまいました（^| ^ ;）
また次作をお楽しみに！

まさかの通学スタイル

実際に考えてやってみたハンカチ作戦は予想以上に難しい結果で終わってしまった。

考えが甘かったのか、詰めが甘かったのか。

考えれば考えるほどこの作戦はチャチだったような気がしてきた。だが、作戦を決行した夏希にとってはシヨックだったであろう。でも考えてみればこれがたったの一回目。次にはしっかりとした作戦を作ってウインスキーと夏希とのコミュニケーションを取れるようにしなくてはな。

最初はめんどくさいと思っていた俺だったが徐々に責任感というものが湧いてきていた。俺も夏希にしてもらったように最初のアシストはしてあげないとして。

体育の授業が終わって夏希は外の中庭を見て憂いでいた。

それはそう、作戦が失敗に終わったからだ。甘い作戦だったにしろ、これは夏希の初挑戦でもあったのだからシヨックは無理もないだろう。

俺自身甘い作戦を決行してしまったのには責任があるし、仲間である夏希が落ち込んでいるならばそれは無条件で慰めてやらねばならない。

「おい、夏希。元気出せよ。その・・・なんつーか、悪かったな。」

作戦失敗してしまって。作戦がちよつと甘かったな。」

「いいわよ、だって最初だったし。仕方ないよ。作戦には100%なんてないんだしさ。」

「まあ・・・それはそうだったけどさ・・・あ、そうだ。夏希。自販機行かないか？なんか奢ってやるからさ。」

「いい、今回は遠慮しておく。」

シヨックのあまりか乗り気ではなかった。でもそんな憂鬱になって

いたって仕方がない。とにかく前を向かないと・・・

「おら！いくぞ！」

「わわわ！ちよつと・・・あんた何すんの！」

多少強引ではあったが夏希の腕を引つ張って自販機の前にやってきた。ボヤってしていても何にも変わらない。自販機に来ればそれが変わるって言うわけじゃないけれど何もしないでただ考えているだけじゃだめだからな。

「よし、夏希、何飲む??好きなのを押してくれ！」

そう言っつて自販機の中に小銭を入れる。

「・・・足りないわよ」

「ん?ちゃんと金入ってるぜ？」

「あたしの飲みたいのでしょ?このペットボトルのがいい」

「え?おいおいちよつと高いじゃないかよ。ま、良いけどさ」

ピツつと夏希はペットボトルのグレープ味の炭酸飲料を購入し、俺はアイスコーヒーにした。

その場で夏希は炭酸飲料をがぶ飲みをし始めた。

「おいおい、おまえ苦しくないのか?ゲップがでるぞ？」

「うるさいなあ大丈夫だつて・・・うつぶ・・・」

そんな時だった。高身長な男が俺達の前にやってきた。そう、ウィンスキーだ。

願ってもないタイミング。夏希は、というと・・・顔を赤くして黙っていた。ここで突っこみたいところだが逆に突っこむと変に怪しまれてしまう。ここは俺から気さくに話すとしよう。

「ねえ、君はA組のウィンスキー君だよな？」

「お、そうだけど？」

「俺はC組の黒木優也つて言うんだ。さっきのバスケットすごかったね」「いやあ・・・それほどでも」

照れながら頭をポリポリと掻いていた

「すごく身長高いけどバスケットも上手いから元々やってたの？」

「そんなことないよ。身長も生まれつきでね、バスケットというか野球

の方が得意なのかな？一様野球部だし！」

少し意外だった。なんとなく見た目的な意見で言えば野球部っぽくはなかったからだ。

「へえそうなのか！じゃあ卓也と一緒に？」

「おお卓也知ってるのか！C組だから同じクラスなのか！」

「そうそう！」

キーンコーンカーンコーン……

「おっと、授業の時間だな！じゃまたな！」

「おう！」

ウインスキーの第一印象はとても良かった。それにしても卓也と同じ野球部だったなんて……それを知っていたら卓也を巻き込んで良い作戦立てれそうだったのになあ……って、夏希はずっと顔を赤く立っているだけじゃないか！

「おい、夏希！おまえは何しているんだ！せつかくのウインスキーがいたのになんで俺ばかり話しに盛り上がってんだよ！」

「うるさい。だって、しょうがないじゃない……あのウインスキー君と同じ空間にいたら……そりゃあ喋れないわよ。」

「はあ？それじゃあ作戦が成功していても意味がないじゃないか。同じ空間に居ることになるんだから。」

「それも、そうね……でもあの時は心の準備があつたからきつと大丈夫！でも今回は不意打ちだから……」

「ったく……でもうちのクラスの卓也と同じ部活だったなんてな。バスケットっぽいのにまさかの野球だなんて。せつかく情報収集できたんだし、卓也にウインスキーのことを聞いてみようぜ。」

「そうね。思わぬ収穫だったわ。」

今回はとんだハプニング？だったわけだが俺はウインスキーとのコミュニケーションに成功した。まさか野球部だったなんて想像がつかなかった。

そして授業が終わって昼休みに卓也に話しかけた。内容はもちろん

ウインスキーのことだ。

「なあおまえ野球部だったよな？ウインスキーって知ってるか？」

「ああそれはもちろん。有名だし目立つせいか、存在感があるな」

「いやあ俺はさつき知ったんだ。」

「おいおい本当か？かなり有名だぞ？」

「そうだったのか？ちなみに俺の他に夏希も知らなかった。」

「・・・そうなのか。意外と知られていないものなのかもしれないな。」

「ちなみにそのウインスキーってどんなやつなんだ？」

「こりやまた唐突だな。そうだなあ、あいつはまず野球部のエースピッチャーをやっている。それに抜群のセンスの良さで守備はどこでもできるし足も速い。だから3番や4番、5番などのクリーンナップで打つこともあれば、足を生かして1番で打席に立つこともできる。野球部としては右に出るものがないくらい完璧なやつだよ。ピッチャーをやっているのは能力のほかには背が高いのがあるかも。背が高いとボールが高くから飛んでくるから打者としてはなかなか打ちづらいんだ。」

「へえ〜なんだかウインスキーの他に野球にまで詳しくなれそうだよ。ちなみに人間性としてはどんなやつなんだ？性格とかさ。」

「ん〜そうだなあ。一言で言うと面白いやつかもな。チームのムードメーカー的なところがあるし。だから部でもクラスでも人気者らしいな。」

「なんだか聞けば聞くほどすごいやつだな。まさに完璧だ。」

「ま、あの一部の性格を抜かせばね・・・っと、ところで気になっ
てはいたが、なぜ優也がウインスキーのことを聞きたがるんだ？ま
さかおまえの好きな女がウインスキーのことが好きだとか？それで
敵を知らないおまえは敵を知っておきたいとか？」

「いやいや、全然そんなじゃないぜ。そんなわけがあるわけがな
い。俺の知り合いが気になっ
てるみたいでさ。ついでに俺も知りた
くなっ
たから聞いてみたまでだよ。」

「ほづ、そうなのか。」

「ところでさつきボソツと言ったあの性格って何だ？俺は聞き逃さなかつたぜ！」

「あれ？そんな事言っただかな？ま、バレちゃしょうがない。いずれ、って言うかすぐわかるだろうよ。」

「そうなのか？まあ気になるところだが楽しみは取っておこうか。じゃ、俺ジュースでも買いに行くわ。悪かったな、サンキュー！」

「ああ良いつてことよ。」

野球部所属の卓也から色々ウインスキーのことを教えてもらった。これは夏希にも色々伝えてやらないとな。それにしても卓也のやつ推理っていか予想が下手だよなあ〜どうして聞きたがる？おまえの好きな女が好きだから敵を知りたい？んなわけねえだろ。夏希のことを好きだなんて片時も思っていないぜ。俺には美穂さんがいる別に付き合ってるわけじゃないけど・・・ふっふっふ卓也も推理がまだまだ甘いな。

そんなことを思いながらポフッと胸の辺りにぶつかる感触を得た。

「おっ夏希じゃんかよ。ちょうど良かった。おまえに話があるんだよ！」

「あんたねえ、あんたに当たったせいでジュースこぼれちゃったじゃない。どうしてくれるの!？」

「なんだ？おまえの前方不注意が問題じゃねえか！俺に滅茶苦茶なクレーム突き立てんじゃねえ！」

「うっさい！あんたここに來るってことは自販機のところに行く予定だったってことよね？」

「まあそうだけだよ。ジュースでも買っておまえに土産話があったからそれを聞かせてやろうと思ったわけだよ。」

「ふう〜ん。じゃあさっそくお聞かせ願おうかしら。でも、さすがにまずいから溢しちゃったジュースを拭かなきゃね。これはトンスラできる量じゃないわ。」

そういつて、足元を見た。ジュースと氷が散乱していた。うちの学

校は缶やペットボトルのジュースの他にカップで飲むタイプのジュースの販売もあるのだ。今回夏希はカップジュースを購入し、俺にぶつかってコップを落とし、ジュースと氷が散乱してしまっているわけだ。

「とりあえず俺は雑巾持ってくるからおまえは他の人が滑ってしまったりしないように見張っとけ！」

「わかったわよ。」

俺はすぐ近くの水飲み場の下にある雑巾とバケツを取りに向かった。昼休みということもあって特に他の人が使っている様子もなく、しっかりと雑巾とバケツは定位置に置かれてあった。

それをもって急いで事故現場へと向かうのだった。

「ちよつと、あんた遅いわ！完全に私が溢しましたって、さらし者状態だったわよ！」

「いや、間違っておりませんけど？」

「いいから！早く拭く！」

「チツ！何で俺がこんなことを・・・」

そうして夏希は見張りを、俺が掃除を行った。

俺の方こそ少し前方不注意だったのかもしれないがこれはあんまりだ・・・

掃除を済ませ、自販機コーナーへと向かった。

自販機コーナーには夏希の飲んでいたカップジュースとどこにでもある通常タイプの自販機。そして乳製品専門の自販機。これは育ち盛りの生徒への配慮なのか、カルシウムが牛乳の何本分入ってますとアピールしている製品や豆乳のコーヒー、バナナ、イチゴ、きな粉など様々な乳製品のある自販機もある。

「ねえあんた。さっきのクレームは取り消すけど、前に言った豆乳をおごる約束忘れてないでしょうね？」

「ああしつかりと覚えていたぜ。つまり、クレームは取り消すけれどもさっそく豆乳を買ってくれてことだろ？」

「ま、そういうこと。早く1000円入れて！」

「はいはい・・・」

1000円を投入すると夏希はもう決めていましたと言わんばかりのスピードで商品ボタンを押した。飲む味はもうすでに決めていましてといったところか。

「やっぱこれよねえ〜！豆乳コーヒー味！」

そういつて夏希は豆乳飲料側面にあるストローを取り出し、勢いよくストローを突き刺す。そして風呂上りのどっかの大将の如く腰に手を当て一気飲みをし始めた。

「んっぐんぐんぐ・・・ツプハア！やっぱこれよね！豆乳コーヒー味！」

「それ、二回目だぞ。それにしても風呂上りのような飲み方だな。女の子はやっぱ両手でジューズ持ってチューチュー吸うもんじゃないのか？」

「そんなんびりっ子に決まってる！世の女の子は結構がつつりと飲むものなのよ。ごめんねえ〜なんだか夢を壊しちゃって。」

そういつてがぶ飲みを肯定する。世の女の子がすべてチューチュー飲みではないにしろ、夏希の飲み方は様になりまくってる。変わった人が見たらその飲み方に惚れてしまふんじゃないかと思う。

「んでさあ、土産話だっけ？早速聞かせてくれない？」

「ああ、卓也から聞いたんだけどさ、ウインスキーのこと。」

「ああ寺尾卓也ね、うちのクラスのこと。あんた仲良かったんだ。で、なんでその寺尾がウインスキー君のことを色々知ってるわけ？」

「ああ、この間ウインスキーと話してたときあっただろ？あの時に野球部だつて言ってたから、じゃあ卓也つて知ってるか？つて話になつてだなあ・・・つておまえもそこに居たんだからそれぐらい覚えてろっつーの！」

「はいはい悪かったわよ。んで、寺尾からどんなことを聞いたの？」
そして俺は卓也から教えてもらったウインスキーの情報を覚えている限り夏希に伝えた。

「へえ〜ウインスキー君エースピッチャーなんだあ！！かつこいい〜！！それに友達も多いなんてそれこそ完璧！ウインスキー君だわ！！」

すっかり夏希は話だけを聞いて妄想の世界へ入り込んでしまった。

「どうだ、良い土産話になったか？」

「うん！」

満面の笑みだった。こいつ、いつもしかめっ面ばかりしているイメージがあるけど、笑うと結構可愛いんじゃない？　っておいおい、疲れか？俺は疲れているのか？何で俺はこんなやつのことを？あー、すっかりしろ、黒木優也。おまえはおまえが好きなのは美穂さんだろ！思い出すんだ！美穂さんのあの笑みを！！

「ちよつ、真剣な顔をしていたら何いきなりスケベ面してるの！・・・きもい顔見せんな！」

「え？スケベ面ってなんだよ！しかもきもいって・・・ひどくね！？」

「あんたのその顔をそのまま言葉で表現をして感想を述べたまでよ。何か文句があるの？」

「そりゃあもう、大ありだよ。」

そうやって他愛もない話をし、夏希の突っ込みを受けたりしていた。

午後の授業、国語の授業でかつたるく、寝みいなあと、うとうとしていた時だった。

ルーズリーフ一枚を手のひらサイズぐらいにまで折って俺に渡してきた。後ろから流れてきて、俺の席は後ろから二番目なのだから俺の後ろには夏希しかいない。

いったいなんなんだと思い、あくびをひとつしてそのルーズリーフを広げた。

「あんた今日放課後暇？」

唐突な質問。俺は返事を出す。

「ああ」

そう書いて後ろの席へ投げ込む。そうしてすぐに返事が返ってきた。「今日ウィンスキー君がどんな感じに部活やってるか見に行ってみない？」

つと前向きな姿勢をあらわした。ま、別に暇だから良いか。

「ああいいぜ。」

さらつとルーズリーフに書き込み後ろの席へ投げ込んだ。

部活の見学か・・・あんまり見てると変なやつ扱いされそうだよなあ・・・俺は部活に入っていないから入部希望者ですか？とか言われたらそれはそれでめんどくさいなあ。見学に行くのは問題ないが、あんまり長時間は居たくないものだ。

放課後、俺と夏希はまだ教室にいた。なぜすぐにグラウンドに行かないかというところ今更になつて夏希が恥ずかしいとか言い出すからだ。なんでまた今更・・・と思うのは置いておいて、まずはこいつを誘導しなくては、俺自身ちよつと行きたくないとか思っちゃったけど、一度決めたことはなんだか変える気がしないんでね。

「なあ、おまえ今更になつて何で恥ずかしいとか言つてんだよ。おまえが言い出したことなんだからよ。さつさと行こつぜ。」

「ちよ、ちよつとまつてよ！心の準備が・・・その、目が合ったらどうしようとか・・・」

こいつはいつたい何を考えてるんだ？心の準備ならともかく目が合う？そんなわけはない。グラウンドだつて広いわけだし。こいつは野球部のベンチに入りながら見学でも考えてるのか？

「んじゃあまた作戦でも立てるか？」

「作戦？どんな作戦？それをすると見に行きやすくなって恥ずかしくならない？」

「んな保障はねえ。けど、なにも考えずに行くよりは良いだろうということだ。」

「じゃあどうすんのよ。」

言つてみたものの何も考えてなかった。

しばらく考えて、作戦っぽいことを考えた。

「考えたぜ。」

「で、どんな？」

「まず校舎裏にあるグラウンドに行く。校舎裏からグラウンドに入るところに階段がある。その辺で見れば良いんじゃないか？」

「ん〜でもちよつとあそこだと遠いのよね・・・」

「でも、普通に考えたら部活してるやつ以外あんまりグラウンドに立ち入るやつは見たことないぞ？つまり、グラウンドに入ったら結構目立つわけだ。目立つたら恥ずかしいだろう？」

「それもそうね・・・あんまり遠くからじゃわからないかもしれないけど、実際に行ってみないと尚更わからないわけだし、まずは行って見ましよう。その作戦で。」

「了解。」

作戦を結構することとなった。

まずは教室を出て、一階の体育館への渡り廊下から校舎裏に出てグラウンドに行くことにした。校舎裏には部室が多く存在し、多くの部活動の生徒がいた。野球部の部室にはマネージャーらしき人が立っついて部室を掃除してるようだったのもう野球部はグラウンドにいるようだった。

そのままグラウンドに向かっていくと異例の光景が。

部活の見学をするやつなんて1学期始まって早々の時しか存在しないと思っっていたら、かなりの量がいた。それも男子生徒ではなく女子生徒ばかりであった。

なんなんだと思い、その女子生徒についていくと、そうやら野球部のウインスキーを見に来ているようだった。

「うわぁ！なにこの人の数！何人いるのよ！しかも狙いはウインスキー君目当てみたいじゃない！！」

「なあんだ俺たちだけじゃなかったみたいだな。それにしてもこんなにアイドルみたいな感じって・・・漫画だけじゃなかったんだな・・・ツクソウ・・・正直羨ましいぜっ！」

周りは野球部の気合の入った声よりこちら側にある黄色い声援の方が響いて聞こえた。

「なんなのよ！うるさくって集中ができない！！」

「いやあまったくだ・・・」

「帰るわよ！！」

「へいへい」

黄色い声援が凄すぎて夏希様もご立腹な様子だった。

仕方なくまた校舎裏から帰ろうとした時、校舎の影からマンションなのかアパートなのか見たことない建物があった。

「なあ、夏希。あの建物って何だ？あんなのあったのか？」

「ん？あれはね、寮よ。もう建物自体はもすぐ完成するみたい。」

「へえ、あんなの建設してたのか。知らなかったぜ。」

「うそ！？知らなかった？ありえない！」

「え！？そんなにあの寮の建設については有名だったのか？」

「有名よ！かなりね！有名になったのも噂が原因でね。」

「噂ってどんな？」

「あの寮はもうすぐ完成するのよ。そこでね、寮生を向かえる前に寮としてのシステム構築のため、今いる在校生の半分以上が寮生になるのよ。」

「なにに！？それはある意味強制だな・・・」

「そうなのよ！私は正直賛成派ではないわ。確かに学校から近くなるし寮生活も面白そうだと思う！けど、その反面プライベートな時間が少なくなってしまうじゃない？」

「まあ確かにそれは・・・でもそんな噂どっから出てきたんだ？」

「なんか、遅刻の常習犯の子が教務員室で説教を受けていてね、その子は教務員室に入るのも慣れてしまっているわけ。先生が説教している時、上の空でぼけっとしていたら他の教員達の会話が聞こえてきてその情報を耳にしたんだって。」

「なるほどなあ教員の秘密の情報がばれてしまったわけだな。」

「まあそんな感じ。それで、そんな噂が結構飛び交っていたわけ。」

それでその噂は本当になつてしまつたわけ」

「ん〜なるほどなあ・・・でも想像すると楽しそうだけどな！クラスメイト以外の人も仲良くなれそうだし、なんとなく青春って感じがするよな！」

「あんたはお気楽ねえ〜確かに楽しそうな部分やワクワクする部分はあるけどそれ以上に色々な部分での心配なことが多いわ。」

「ふ〜ん・・・そつか！まあ他の人はどんな心境なのか聞いてみようかな！」

翌日、俺は卓也に寮生になる噂を聞いたことがあるのかどうか聞いてみることにした。

「なあ卓也はその、寮ができれば寮生になるっていう噂は聞いたことがあるか？」

「そりゃあもちろん！ちなみに俺は寮生活賛成だ！」

「なんでだ？」

「俺ってバスで通学してるだろ？朝練や遅練をするとき、なかなか通ってくるのも大変なわけだよ。けど寮からだつたらだいぶ楽になつてくるだろ？」

「ああなるほどな。おまえはバス通学だもんな。」

「ちなみに野球部は全員寮生になるぞ。監督の推薦ということもあつてな。チームプレイだし、そういうところでのコミュニケーションや、寮生だと野球への取り組みがしやすくもなるからな。」

「ほうなるほどなあ〜！さつて、俺はどうすつかなあ・・・」

「おいおい・・・まだ決めてないのかよ！？」

「まあそうだが・・・」
「・・・おまえつてやつは・・・締め切りが一樣今週いっぱいまでなんだ。」

「まじかよ！？そうだなあ・・・面白そうな部分もあるしやってみようかな。」

「ああ。俺も野球の事を抜きにしても楽しみだぜ。」

それにしても本当に寮の建設なんて全然知らなかったなあ・・・本当にそんなのがあったのか？・・・って、あつたんだよな。俺だけ知らなかったわけだし。それにしても俺自身時々抜けてるよな・・・こんな面白いネタ普通の人はみんな知ってるよな。

授業が始まりそうなら5分前程度の時間。クラスメイトのほとんどが自分の席に座って近くの人と話している。俺は隣の席の美穂さんに寮生活の話を持ち出してみようと思った。

「ねえ、美穂さんは寮生活希望する？」

寮生活が始まるかもしれないことを知らないなんて馬鹿にされるんじゃないかと思い、さぞかし自分は知っているような口調で話し出す。

「私？私も参加だよ。」

「そうなんだ！お嬢様だから寮生活なんてしないんじゃないかと勝手に思い込んでたよ。」

「そんな風に見ないでよおゝ今まで通り普通に接して？」

「ああごめんごめん！でもなんで？」

「楽しそうじゃない？大人は仕事の都合で仕方なく寮生活を多くっている人っていると思うんだよね。でもこっちは学生での寮生活でしょ？寮生活をする人生なんて正直あんまりないもんだと思うな。だから貴重な体験ができると思うんだ。」

美穂さんらしい明るく前向きな意見だった。

「確かにそうかもね。寮生活なんてなかなかする事なんてないだろうしね。」

「うん。私たちは恵まれてるんだよっ！」

「よし！俺も寮生活するぞ！」

「あれえ？まだ決めてなかったの？」

「あはは・・・そつ実はまだなの。決め切れなくてねっでも美穂さんの前向きな意見で俺自身前向きに考えられたよ。」

「私も寮生活するわっ！！！」

突然後ろの席の夏希が言った。おそらく俺と美穂さんの話を聞いていたら俺同様前向きになれたのだろう。

「じゃあ寮の希望者は職員室で申込書と注意事項もらってこなきゃね。今週いっぱい締め切りだから早め早めに行くといいと思うよ。」

「ありがとう、美穂さん。」

そしてすぐにガラガラツとドアを開け先生がきて退屈な授業が始まることとなった。

ドッキドキの寮生活

あれから提出物を出し、ついに明日からは楽しみに待っていた寮生活！

もちろん、男女別々の寮になっていて、男子が女子寮に入った時点で停学が確定するほど厳しいらしい。あくまでも、これからの寮生のためのデモンストレーションみたいなものを兼ねているらしく、締める部分は締めていこうという精神らしい・・・とはいえ、女子寮に入った時点で一発停学とはあまりにも厳しいような気もするが、そんな危険なことはいらないということで置いておいて、寮生活の第一日目は寮生全員でキャンプファイヤーとBBQを行うことになっているらしい。キャンプファイヤーにBBQ・・・正直どれも楽しみだ。せつかくのイベント。このイベントを通してもっと美穂さんと仲良くなりしたい！

そして、ここからが本番・・・何が本番って？本番というか勝負というか、重要というか、今俺の手元には一通の手紙が来ている。その中には相部屋となるルームメイトが記載されているらしい。そのルームメイトとは一様同学年同士で、二人一組のペアになっているようだ。なぜそんな封筒を寮生活が始まる直前に送ってきたのか、学校側の楽しませ方なのか忙しかったのか。そんな事より問題は中身だ。さて、果たしてその相手とは・・・いったい・・・

俺はその封筒を丁寧にペーパーカッターで綺麗に切っていく。空けてみれば一通の手紙。ドッキドキしながらその手紙を開けてみる。冒頭は丁寧なご挨拶で始まっていて、読んでいくと結果はウインスキーだった。

その結果に正直複雑な気持ちだった。知っている人にしるあまり話したこともないしましてや、友達というわけでもない。それに夏希が知ったら色々と情報提供でたかってくるに違いない。ったく、実にだるい。

でも、人は良さそうだったわけだし相手も少なからず俺の事を知っている。ここは戸惑う所ではなくこれから仲良くなっていこうと前向きに思うのが正解であろう。

とりあえずルームメイトは決まったわけだ。あとはイベントを通じてどう美穂さんに近づいていくか・・・だな。

夜も更け色々考えてモヤモヤ考えていたが良い考えも浮かばずやはりその時になってみないとわからないという事でその日は寝ることにした。

翌日、今日から寮生活ということもあって、今日は母さんの作ってくれた朝食がしばらく食べれなくなる事に今更ながら気がついた。ウキウキばかりしていたからあんまり家での生活を考えなくなっていたのだ。

「母さん、今日から寮生活になるからしばらくご飯食べれないな。」

「そうねえ。食費が少し浮くかしらね。」

「かもしないな。へそくりに回せばっかりいるなよ。」

「あは？ばれちゃった？」

ぺろつと舌を出す母。正直歳を考えて欲しい……………

「ばればれだよ。」

他愛もない話をいつもどおりしていたがきつと母さんも少し寂しいんだろうな。俺自身少し寂しいから。

寂しい気持ちを抑え、楽しみな気持ちを開放し、俺は学校へと向かった。

学校に着くと、寮生になる人は寮の前に集合していた。

寮生になる人は結構いて現場は混雑状況だった。その人混みの中、背が高く目立つ人間を発見した。ウインスキーだ。ルームメイトになるウインスキーのところには行こうと思ひ、ウインスキーの

方へ人混みを掻き分けて行った。

「おっ！我ルームメイトよっ！！！」

なんと、ウインスキーから話しかけてくれた。

「俺のこと覚えていてくれたんだね。ウインスキーは目立つから普通に覚えられるけど俺とはあまり接触がなかったから忘れてると思っただよ。」

「はっはっは！！俺は意外と記憶力がいいんだぜ？」

と、そのウインスキーの隣におさげを二つにしている女の子が側にいた。背が小さく中学生ぐらいにも感じる。まさかウインスキーの彼女なのだろうか・・・だとしたら夏希はピンチだな。

「えっと・・・その子は？」

「あっこいつか？俺の妹だよ。」

「兄がいつもお世話になっております。私はウインスキーの妹のチエルといます。」

「あ、こちらこそよろしく。」

「偉い！よく挨拶ができました！チエル！」

ウインスキーはチエルの頭を撫でた。

「こらあ！だからあやめてっばっ！！人前で何するの！！！」

「はっはっは！！！」

ウインスキーは笑っているがチエルは思い切りゲシゲシと肘打ちをしていた。

「ははっ・・・ウインスキーって妹と仲がいいんだね！」

「こいつ照れ屋でなあ、困ったもんだよ。ったく可愛くて仕方がないぜ！」

え？まさかウインスキーはシスコン？いや、ロリコン？

「んんうゝこの兄貴犯罪・・・」

チエルって子も苦労してるんだろっなあ・・・

あ、もしかして以前卓也が話していたちよっとした癖って言うのはこのことなのか？妹が好きすぎるといっつか可愛がりすぎるといっつか・・・俺自身兄弟がいないからその感情がわからないけれどもなんだ

かその関係が羨ましく思えた。

しばらくすると遠くから声が聞こえてきた。その声の正体は夏希だった。

こんな時間に来るんだからきつと昨日の夜に準備に追われていたのか、もしくは楽しみで仕方なかったのか。そんな夏希は他よりも遅くにやってきたのだった。

「よっ寝坊か？」

夏希は無表情のまま

「ん、ちよつとね。色々あってさ。」

ウインスキーが目の前にいるのにも関わらず淡白な返答だった。なんだか普段どおりな感じがするけれどもいつもとは少し違う感じがした。けど俺の思い違いかもしれないので特に突っ込まないことにする。

「夏希はルームメイト知ってる人だったか？」

「全然。知らないし聞いたこともない名前。はあくなんだか不安だわ。」

「まあこれからずっと同じ部屋なんだし仲良くしていかないとな。」
夏希が来てすぐにアナウンスが流れてきた。

「では、みなさん、自室に入ってもらいたいと思いますのでこちらに並んで下さい。荷物を置いたら通常通り授業を始めます。本日の授業は2限から行いたいと思いますので寮の部屋の施錠だけはきちり行うように。」

これから寮の中に入るようだ。実際誰も寮の中には入ったことないからすごく楽しみだった。新築だしものすごく綺麗だろうな。

「ウインスキーは寮生活は楽しみ？」

「ああそれはもちろん。なんたつて寮生だぜ？普通の学校生活ではなかなか過ごすことができないんだ。それに元々通学していたから通学生と寮生と両方楽しめるんだから俺たちつてすごい運がいいと思っぜ！」

これはまたすごくポジティブな意見だった。ウインスキーには不安を感じているようにはまったく思えない。ある意味すごく頼もしく感じ、同じルームメイトでこれから楽しめる様な感じがした。そんな中夏希はというと、眼鏡をかけたシヨートの子、一言で言うところ少し地味な子と一緒に寮へと歩いていった。

寮に入ってみるとそこはものすごく綺麗な感じでもことなく新築の匂いのような、病院の匂いのようなそんな感じがした。部屋の中に入ってみるとベットは二段ベットではなく、ホテルのツインコースのような形でベットが二つありその間にライトがあった。学習机は学校にあるようなタイプとは違い、本棚やライトがついており、学習デスクのようなタイプ。床はフローリングではなくカーペットでできていてテーブルは簡易式の折りたたみテーブルだった。なんだが通常の寮というより、アパートやビジネスホテルを混ぜたように感じた。でもさすがは私立校という感じさえもしてくれた。

「優也、すっげえ部屋だな！くうくうマジ感動した！！」

「確かに凄いね。なんだか寮という感じじゃないな。」

「だよな。でも床がカーペットだけだよ、俺大丈夫かな？すっげえソックス汚いからよ、部活で。それにコーヒーとか飲んでて溢したらとれないだろうなあ・・・」

「まあ帰ってきたらすぐ脱いで、洗濯機に入れればいいし、コーヒーは溢さないように気をつければいいよ。」

「おっと、優也さんは厳しいっすなあ！俺は意外とナイーブだからあまり強く言わないでくれよ？」

「ナイーブねえ？まあそこまで厳しいことは言わないよ。」

「ははは！お手柔らかに！」

なんだかこの瞬間がウインスキーと初めて普通に話せたような気がした。これからの寮生活は毎日顔を合わせるんだしもっと仲良くなっていかなйと思ったのだった。

そして二限の授業が始まるので俺はウインスキーと学校へと向かった。

教室に着くなり夏希はさっそくウインスキーの話題へと入った。

「あんたホントに羨ましいわあ。はあくあ……」

「なにしょんぼりしてるんだ？」

「だってさ！特に興味を持たないあんたが、私の最大級に興味の持つてる人と関わりが持てるとなつたら……そりゃ羨むでしょ！」

「まあ確かにそうかもしれないが。でも寮は男女別だからな。仕方がないっっちゃ仕方がないな。」

「むうくわかつてるわよ！それくらい！！」

「今度俺の部屋くればいいじゃないか。男子が女子寮に入るのはまじいけど女子が入るなら確か問題ないはずだぜ？」

「そんなの知ってる！だから行くに決まってる！」

「そかそか。っていうかおまえのルームメイトはどんな感じだったんだ？」

「知らない人だった。」

「なんだかこれまで話していた話のトーンではないような気がした。けど俺が話を切るわけにもいかず。」

「眼鏡のシヨートの子か？」

「え？知ってるの？あんたの知り合い？」

「いや、朝寮に行く時見てみたらそんな感じの子と一緒に歩いてつたからその子なのかなって」

「ああなるほどね。でも全然話してないから荷物置いて速攻で学校着ちゃった。」

「人見知りだったのか？ウインスキーの時だけじゃなかったんだな。」

「人にもよるわよ。」

「頼杖をして話しかけるな的な雰囲気を出したので俺も前を向き頼杖をすることにした。」

なんだか今日の夏希の態度がいつもより違ったような気がする・・・
・女性特有の一ヶ月に一回のイベントか？それともなんか気に障るようなこと言ったか・・・？でもそんなことより、あいつが俺の部屋に来る？でもまともに話せなかったあいつがホントに来れるのか？来たとしても話せるのか？あいつのことも心配だけど俺もこの寮生活、今夜のBBQなんとか美穂さんと関われるようにしなきゃな。とりあえず今日は朝からばたばたしていたせいかなんだか眠いのでこの二限は寝ることとした。

キーンコーンカーンコーン・・・
どうやら二限は終わったようだ。いやぁそれにしても、人の声が溢れるこの学校生活いう環境に希少価値ともいえるチャイムという名の電子音。良い目覚ましになるな。

「はあくねみい・・・ちつとコーヒー買って来るかな。」

「あたしも行く！」

「ふあくなんだ？夏希も行くのか？」

「豆乳が飲みたいのよ。」

「ふくんまあいいや。」

「行くわよ。財布。」

「だあくれが財布じゃ！」

「あんた忘れたの？豆乳を奢らなきゃいけない約束。」

「はいはい・・・覚えてますよ。」

そんな時だったジュース売り場のところに眼鏡のショートの子がいたのだった。

夏希は苦虫を噛んだような顔をして目を合わせようとしない・・・なぜ？

「ども、こんちわ」

ちよつとどうすればいいかわからなかった俺は挨拶を試してみた。

「こんにちわ。」

「なんだか静かな声だった。」

「夏希さんの友達？」

「まあ、ただのクラスメートよ！」

「よく話に出てくる優也さん？」

「話なんかに出さないわよ！！」

「ん？なんなんだ？この二人・・・今日が初対面ではなかったのか？」

「ではすいません、次の授業は移動教室なので失礼致します。」

頭をペコッと下げその子は去っていった。

「なあ夏希・・・おまえの知り合いだったのか？てつきり俺は初対面なのかと・・・」

「別に、隠すつもりじゃなかった。ただ、そう・・・興味がないのよ。あいつには。」

「ん？どういふことなんだ？単におまえが好きではないって事か？」

「まあいいから！早くお金入れて！」

「はいはい・・・」

お金を入れてすぐにボタンを押して豆乳を出しそれを飲みだす夏希。

「あの子とはいつから知り合いなんだ？」

「なに？あんた浮気？美穂がいながら！！」

「いや、ばかな。そんなわけじゃ・・・」

「ばかね。冗談よ。あいつの名前は白石小夜子っていうの。そうねえ去年の夏ぐらいいだったかしら。あいつと話すようになったのも。」

「なんだ。友達なんじゃないか。」

「べ、別に友達とかそんなんじゃないかって・・・もう、なんていうのかなあーちよつと苦手なのよね。」

「おまえにも苦手な人とかいるんだな。」

「あつたりまえでしょ！？あたしだって人間だもの！」

「そんなの知ってるけどなんだかおまえって誰とでも仲良くなれそうタイプだよな。」

「ま、それはあんたの妄想で、そうではないってこと。」

「まあそういうことか。」

「なんだかあんまり話していて面白くなかった。なぜだろう・・・けなされているから？俺の妄想だったことに自分が気づいたから？なんだかよくわからないけど話していて面白くないと感じたのだった。そんな時、美穂さんがやってきた。自販機コーナーに来るなんて珍しい。」

「あれ？美穂！どうしたの？珍しい！！」

「いやあその・・・夏希が豆乳にはまってるしさ！その・・・ちょっと飲んでみたくなってね！つい・・・なんだか真似して飲もうと思っただけで夏希に会っちゃって恥ずかしいなあ」

「そうなの！？嬉しい！あのね、あのね、このイチゴ風味もおいしいけどバナナ風味もおいしいの！けどね、けどね、やっぱりこのコーヒー風味が一番おいしいの！美穂はどれにする！？」

「ん～そうだなあやっぱり夏希がオススメなコーヒー風味にしてみようかな。」

「ホント！？後悔しない味だから安心して！」

ピツ ガシャン・・・

その時俺は自分だけの世界に入り込んでいたことに気がついた。美穂さんがいるつてのに俺ってやつは・・・でもさっきのこと気にする必要のあることなのか？なんだか神経質になっているだけじゃないだろうか？夏希もあんな様子だし。 ったく、あいつって

やつは美穂さんにはすごく友好的なやつだよな・・・

キーンコーンカーンコーン・・・

「やつば、いそごー！美穂！！」

「おっと！しまったねえ！」

「あ、おい！待ってくれよお！」

二人走り去っていく廊下を俺は追いかけて走っていく。きつとさっきの考えは俺の何かの間違えだ！今もこの時も走っていく風景のように、青春はきつとあつという間なのだからくだらないことを考えるのはよそう！！・・・あ、俺ジュース買うの忘れてた・・・

三人息を切らしながら教室へ入った。そこには先生も居てクラスメイトは席についていた。俺たちは下を向いたり頭を掻きながら平謝りして席へ着くのがだった。

そして退屈な授業・・・こんなつまらない授業、青春にはきつと不要だろう。そうだ！寮生活について一人会議を開こう！

まずはその？帰宅だ。

帰宅をしてもウインスキーは当然部活だから帰ってはいないだろう。話す相手もないし、ここは荷物の整理をしよう。といっても寮だし、大して大きいものは持ってきていない。せいぜい整髪料やエチケットグッズ、ジャージとタオルぐらいだ。あ、でも自室の風呂はシャワーしか使えない。風呂に入るといつてもお湯をためるのに時間がかかるからな。あ、風呂で思い出したぞ！そういえばシャンプーやボディソープ、ましてや洗顔料もない！これはさすがにまずいだろ・・・えっと近くにコンビニとかホームセンターみたいなのはないかな・・・

「なあ夏希。」

「ん・・・すうー・・・」

つく寝てやがる・・・まじめそうに授業受けている美穂さんにはさすがに聞きづいらしいなあ・・・

まあいいや、この近くにあるかどうかってのは後にしよう。

ではその？BBQについてだ。

会議その？にして究極の難関登場だ。早すぎる気もするが会議することも他にはないからいいとしよう。

さてそのBBQなのだが、きつと適当な面子でそろえて行くものつてよりきつと班になると俺は予想する。もし仮に班になった場合焼き始めは他の班には移動できないとしよう。それはおそらく誰もがそうだ。そして班の中で少し食う。これは良く焼けたねえとか、うわっ生焼けだぜ・・・とかそんな他愛もない話をきつとするだろう。そしたらその後が本番だ。友達のところへ行ったりして適当に話し

たり食ったりするだろう。そのときがチャンスだ。美穂さんと話せるチャンスってやつだ。でも緊張するよなあ・・・でもきつと夏希もいるだろうし、近寄りがたいということはきつとないだろうな・・・きつと・・・

「あつう!!」

「どうした黒木。」

授業中に奇声を出してしまった・・・

「あ、いえ、すみません。」

まあ犯人はわかっているんだけどな・・・

「おい、おまえいきなり何すんだ。つかいつのまに起きたんだ。」
授業中なので小声で後ろの席の夏希に話しかけた。

「はあ・・・飽きれちゃうわ。三回目の攻撃でやっと気づくなんて・・・」

「ん？」

「あんたに話しかけようとしてシャーペンの芯を折ってうなじ狙っても何にも反応がないからシャーペンの芯を尖らせてちよいっと刺してみたのよ。」

そんな恐ろしいこと平気で喋ってやがるぜ。このアマ・・・

「はあ・・・んで、何のようだ？」

「BBQの事なんだけど。」

「はいはい。そんで。」

「話しづらいからルーズリーフに書くわ。」

「おう」

しばらくしてルーズリーフが投げられてきた。

「最初は班になってやるじゃない？それが少し落ちついたら席の移動とかあると思うんだけど、そしたらさ、あたし美穂を誘うからあんなはウィンスキー君を誘いなさい。あたしは元々美穂と仲がいいけどあんなはウィンスキー君とはそれほど仲良しではないかもしれないけど同じ部屋だしきつと大丈夫よね。」

これは願ってもないチャンスだった！確かにこの方法ならそこまで

無理のない。それにしても夏希は意外と周りを見えているな。直接話せば美穂さんにもこのことが知れてしまい、面倒なことにもなるところだった。

「OK。」

短い文章ではあるが気持ちの込めた一筆だった。

さて、なんだか安心したことだし、ちよいつと寝ますかね。

そして俺は授業を寝る事にした。

HRも終わり下校時刻。これから部活動を行っていない生徒は積極的に今日のキャンプファイヤーの準備をすることになった。

部活動も終了時刻はどの部活も通常決まっていけないのだがこの日だけは18時に終了となり19時より開始となる。俺はこの18時〜19時の間にウィンスキーにアポを取らなければならぬ。夏希はいつでもどこでアポを取るかわからないけれどもおそらく大丈夫であろう。

俺はグラウンドに向かうことにした。

グラウンドにはテントが立ててありキャンプファイヤーの準備が行われていた。あといくつかのBBQセットが置いてあった。教師のほかにも寮長も手伝いに来ていた。

この寮生活の現在の生徒の5割以上が寮生になったこともあり盛大に行われることとなったのだろう。生徒以外の人が積極的に準備に取り掛かっている姿を見て心が温かくなると同時にテンションが上がってきた。

このBBQでーランク俺はステップアップしてみせるぜ!!

「なんだか楽しそうね。」

小夜子だった。自分が浮かれていたせいか全然来たのがわからなかった。

「ああすげえー楽しみだ。寮生になれてよかったと思っているよ。」

「それならよかった。」

「あ、そういえば夏希とルームメイトなんだよね？」

「そうですよ。」

「あいつまだ着てないのかな？姿が見えないんだけど。」

「ああ彼女なら着替えてくるみたいだったわね。」

「そういう小夜子はすでにジャージ姿だ。」

「そうなんですか。でも小夜子さんすでにジャージですね。早いで
すね。」

「そうかもしれないわね。でも夏希は軍手が見当たらないと言って
ましたわ。」

「仕方ねえやつだな。じゃあ俺軍手いくつか持ってるからあいつに
あげようかな。それにジャージ姿のほうが多いみたいだし俺も着替
えてこようかな。」

「ふふっ優也さんは優しいんですね。」

「んなことないですよ。ついでです。ついで。」

「夏希はあんな感じですけど、喜ぶと思います。」

「そうかなあ・・・じゃ行ってくるかな。じゃあまた！」

「ええ。」

俺は男子寮に戻ってすぐにジャージに着替えて夏希の軍手を用意し
女子寮へと向かった。

えっと・・・来てみたもの・・・よく考えたら俺は入れないじゃ
ん！

だが入り口に行ってみると窓口らしきものがあつた。男子寮にはな
いがこれは一体？とりあえずその窓口へと行ってみた。

「こんにちわ。いかがなさいました？」

「えーっと友達に渡すものとかがあつたんですけど女子寮だと入れ
なくて困ってるんですよ・・・」

「そうなんですね。であればこちらの窓口で問い合わせしてみまし
ょう。男子寮にはこういったものはないけれども女子寮は女子しか
入ることができないので連絡を取るときはこちらの窓口を使つんで
すね。」

「なるほど。便利なものがあるんすね。」

「じゃあ問い合わせしてみますのでルーム番号と名前を教えてくださいませんか？」

「えーっとすいません、ルーム番号はわからないんですけど、名前は村山夏希っていいいます。」

「そうよね、寮生活は今日からですものね。ではちょっと確認いたしますので少々お待ちください。」

「なんだか女子寮には画期的なものがあるんだな・・・これの他にも男子寮との違いはあるんだろうな・・・」

「お待たせいたしました。では今内線繋がりますので出られましたらお変わりいたしますね。」

「はい。」

「寮事務です。今お友達が来られておりますのでおかわりいたしますね。」

「おまたせいたしました。と、電話が変わった。」

「あ、夏希？俺だ。優也だ。おまえ軍手が見つからないんだって？持ってきたから来いよ。」

「すいません、ありがとうございましたと内線を寮事務に返した。」

「夏希はすぐにやってきた。頭は珍しくお団子にしていた。髪の毛が長いから作業には邪魔だと思って結んだのだろう。もしくはジャージというさえない格好でもいつもとは違う自分を見せるためか。考えすぎか・・・」

「優也！どうしてあたしが軍手探してるってわかったの!？」

「ああ俺がグラウンド見に行ったら小夜子さんに会ってさ。それでルームメイトだから夏希はどうしたのか聞いてみたんだよ。それから軍手探してるみたいですよって言うから俺も着替えついでに軍手を取りに行っただよ。」

「ふん・・・小夜子ね。ま、軍手のことは感謝・・・してる」

「なんだよ。そういう時はありがとうだろ？」

「・・・ふん！」

「可愛くねえやつ！」

夏希に軍手を渡し俺たちはグラウンドへ向かった。

さつきグラウンドに出てきたときよりも作業人数は増えていた。

いったいなんの準備をすればいいかわからなかったので俺達は先生に聞いてブルーシートを取りに行くことにした。

「ブルーシートなんてどこにあるのよ！」

「さあな。聞いてくれば良かったな。」

「んもう！」

さて、ブルーシートがありそうなところは・・・そういえば体育倉庫があったな。おそらくそうだった類のものはそういうところにあるだろう。

「よし、夏希。体育倉庫に行くぞ。」

「そこにあるの？」

「わかんねえけど勘だ。」

「まあ当てはないし、行ってみるか。」

行ってみると何人かの生徒が体育倉庫に居てその中の人たちがブルーシートを持って出てきた。

「ありや、これって入れ違い？」

「あたしたちは用無しだったみたいね。」

「んじゃ帰ろうぜ。」

「はあ・・・そうね。」

ちよつとした無駄足だった。

部活の終わる18時にはまだ時間があるからここは作戦会議を行うことにした。

「なあ夏希。BBQとキャンプファイヤーってどっちが先なんだ？」

「えーつと・・・たしかBBQが先なんだけどそんなに時間差はなかったと思う。」

「じゃあBBQで食って席移動があるとして、そんな長い時間は自由行動といけないようだな。」

「そうなのよね。よくよく考えてみたら。」

「なんだかあんまりのんびりってわけではないみたいだな。」

「21時まででつてなってるしね。」

「そうだなあ・・・じゃあもうここは本番勝負になってきそうだな」

「そうかもね。じゃあ頑張りますかね。」

「そうだな。」

結局いい案は浮かんでこなかった。それどころか案外時間がないということだ。制限時間は2時間。正直少なすぎるくらいだ。この短時間にどれだけのチャンスはあるものか。

とりあえずアポ取りに野球部の練習場へと向かうことにした。

さてなんていうか。やっぱり知り合っただのが最近で難しいんだよね。でもルームメイトだし・・・なんとかなるか。

練習場についてみたら練習終了に近づいていたのか柔軟を行っていた。

それからしばらくすると練習場に挨拶する声が響き渡り練習は終了したようだった。なんだか夕日が沈みそうな時間帯ということもあり、この風景が青春を感じさせたひと時だった。

「さて、ちよっと緊張するけどまずは俺の一仕事。やってみせるか
!?!」

ドッキドキの寮生活（後書き）

だいぶ遅くなってしまいました。お楽しみただけたでしょう
か？

これからも頑張っていくのでよろしくお願いします！

ビッグイベント

さて、俺の仕事。俺の正念場。決めてみせるぜ！！

「お疲れ！ウインスキー！」

「おやつ！優也じゃん！なんでここに？」

「いやあその、あのさ、今日BBQがあるじゃん？まあこうやってせつかくルームメイトになったことだし、ここは親睦を深めようと思ってる。班のやつ終わったらBBQ一緒にやらないか！？」

「ほっほう。ゆうちゃんは俺と肉が食いたいのか。」

「ゆうちゃんって・・・」

「はっはっは！冗談だよ。ん〜俺としてはそれに賛成なんだけど野球部のBBQみたいなものがあるんだよな。それもプレー以外でのチームワークを深めようってことでさ。だから、ごめんな。」

「そっか。仕方ないね。」

「ま、そんなに落ち込むなよ！俺とはこれから毎日一緒の部屋なんだし寂しくなったら添い寝してやるからさ。」

「ははっ添い寝は遠慮しとくよ・・・」

「でも、もし顔出しに行けたら行くからよ！」

「ありがとう。」

なんだか部活中だったせいかわインスキーのテンションは高かったいつもはこんな感じで冗談を入れたりするのだろうか。だとしたらとてもユニークできつと退屈しない人なんだろう。

にしても、問題はこの結果だ。いやあ参ったな・・・夏希になんて言われることやら・・・最悪な場合手や足が出るかもしれないから覚悟はしておかないと・・・

でもあいつもアポ取りに行ってるはずなんだよな。もし仮にだめだった場合残念だけど俺も誘えなかったし逆にそれは安心なのかもな。どっちもどっちってことで。

はあ・・・気が重い・・・とりあえずグラウンドに行くか・・・

グラウンドへと行ってみると既に人がいっぱい居た。これは夏希を探すのにも一苦労だ。ウインスキーなら背が高いけれども夏希はその逆だ。身長が恐らく平均以下だ。およそ150センチくらいしかないんじゃないだろうか。そんな夏希をまず探さなきゃならない。でも俺はウインスキーとのアポ取りに失敗しているのだから心の準備も兼ねて俺はあいつより早くあいつのことを見つけなくてはならない。夏樹に先に見つけられたら話しかけるタイミングは向こうが持つことになってしまう。そうなる前にこちら側が先に夏希を見つけては。

恐る恐る人混みの中に入って行く事にした。

「はぁ・・・ホントあいつを探すことに一苦労だ。」

「あのおお困りですか!？」

「うわっと!！」

急なのでびっくりした。まさに藪から棒だ。一瞬この子誰だと感じたが、冷静になって見てみるとウインスキーの妹のチエルだった。

「あ、ウインスキーの妹・・・だったよね？」

「はい!今朝お会いした、兄のルームメイトさんですよね？」

「あ、そうそう。」

「えっと・・・えーっと、お困りでしたか??」

「いや、困ってるってわけじゃないんだけど人探しをしていたんだ。この人混みでしょ?なかなか見つけらんなくってね。」

「そうなんですかぁ・・・それもそうですよね、確かにこの人混みで探すのは大変ですよねえ。でももう少ししたら班を作ってBBQですよ?」

「ああそうらしいね。でもその班なんてどんな風に決まってるんだろ?・・・」

「えっとお・・・寮の部屋の中にパンフレットあったじゃないです

か？」

「ん？パンフレット??」

「はい。その中に班の組み合わせが書いてあるんですよ。」

正直全然知らなかった……まずいな。ってか夏希もこのことをきつと知らないだろうな……俺も知らなかったわけだし。

「……まいったな。寮まで帰る時間があまりないしな。」

「もしであれば、私今持ってますのでお見せしましょうか？」
願ってもないことだった。

「ああすまない。良かったら見せてもらってもいいかな？」

パンフレットの表紙にはイラストが描かれており、「第一回寮生フェスティバル」と書かれてある。よくこんな派手なパンフレット、俺は気づかなかったものだ……自分の鈍感さに腹が立つ。

ページを捲ってみると、あったあった。班の組み合わせ。班には知らない人も居たが唯一知ってる人は、夏希だった。なあんだ、結局探すのは変わりないかと一瞬ため息が漏れるが、この班というものには集合場所というのがあるらしい。つまりはそこに行けばいいということらしい。良かった、ラッキー。

「ごめんね！ありがとう。だいぶ助かったよ。」

「いえいえ、そんな、お役に立てて光栄です！」

チエルは少し頬を赤く染めながらペコッと挨拶をし去っていった。自分より若いのにしっかりした妹だなあ。あんなにちっちゃいのにさて、その班の集合場所とやらのグラウンド東入り口の方へ向かってみるか。

あとは夏希に先に見つからないよう気を張りながら集合場所へと着けばいい。それまでの間俺は心の準備をしていればいい。でもこんなことを両方に集中しながら来るほど俺は達者ではなくいつのまにか集合場所に着いてしまった。

「あつ、来た！あんた遅いわよ！どこをほっつき歩いてたの!？」

「ああなんだ。おまえ着いてたんだ。おまえの事探していたんだぜ。」

「あたしを？探していた？なんでよ？」

「あっ、いやあそのお……」

アポ取りの結果を聞きたいって言おうとしたが今はまだ謝るという心の準備をしていなかったのでやめておく。

「まあよく一緒に居るあたしがいなくて寂しかったということであたしの中で変換しておくわ。」

「それは誤変換だと思うなあ……」

「で、優也、アポはどうなった??」

「まずいつ……まだ心の準備が……」

「えつとお……いやあそのお……すまん！」

「はあ……そんなことだろうと思ったわ。実際の所あたしも失敗だったんだけどね。美穂、寮のリーダーやることになってね、これからのミーティングと寮のリーダー同士の親睦を深めるってことで収集されちゃうらしいのよ。」

「なるほどな。俺も野球部の親睦を深めるって言うことでだめだったんだ。」

「なんなのよ！親睦親睦ってさ！！もつと関わった事のない人のための親睦ってもんを用意しなさいっての！！」

「まあそうだけどなあ……」

でも実際このBBQってやつがその関わったことないやつとの親睦を深める会なんだけどな。班作ってやるわけだし。まあここで突っ込んだら危険なのでやめておくことにしよう。

「まあ仕方がない。ここは普通にBBQを楽しもうぜ。じゃないとこの会がもつたいたないじゃないか!？」

「それもそうね。はあ……せつかくウインスキー君とアツアツのBBQだと思っただのになあ……」

夏希はつぶやき足元の石を軽く蹴った。

アポの件に関してはここは怒られることはなかった。正直冷や冷やしていたので安心した。でも夏希はなんだかしょんぼりしているし、

俺も一緒になつてしょんぼりしているわけにもいかないし。ここは夏希と一緒にBBQを精一杯楽しんでやろうと思った。

「おい夏希！そんなに風送つたら火が消えちまうぞ！！」

「ああああもう！難しい！難しいのよ！！」

「んなイライラすんな。落ち着けよ！」

「あの、もしでしたらこれを使うと良いかもしれません。」

同じ班の一年生が着火材を出してきた。そんなもんあるならさっさとくれよ。まあでもサンキューな。

「ああサンキュー。おい夏希。これ入れてくれ！」

「なにい！あたしの力不足か、くっそお！じゃあ入れるわよ。」

着火材は名に恥じない速度で火をつき始めた。

「やっぱ着火材すごいわ！名に恥じない働きだわ！」

「んじゃ火も落ち着いてきたことだし、そろそろ網敷いて焼く準備でもするか。」

「じゃああたしは肉担当という事で！！」

「ちゃんと肉だけじゃなくて野菜も食えよ。後輩たちも居るんだからあまり食い意地張らないように。変な先輩としての印象を付かない様に気をつける。」

「いやいや大丈夫ですよ。とばかりな素振りの後輩が手を振っていた。

「ふん！あたしの評価なんてどうだったいいや！おいしく食べればそれで良い。」

なんてわがままなやつなんだろう。まあそんな自分勝手だけなやつじゃないだろうからここはスルーしておくことにしよう。

「おっ網も暖まってきたな。よし、そろそろ焼き始めるか。」

ジューっと肉の焼ける良い音がして同時に煙に乗って良い香りが出てきた。

「はあ〜この香り。よだれ汁……」

夏希は目を細めながら口からよだれを垂らしていた。

「なんだよそれ。よだれ汁って……おまえは仮にも女なん

だからもう少し女らしいことを言えよ。」

「女らしい？どついうのかやってみてよ。」

「あん？・・・そうだな。んっん、んう。うわぁとつてもおいしそ
お〜！」

「うわつきも！」

「んだよ！やらせといて。」

「先輩方っておもしろいですよね！仲も良さそうだし！ひよっとして付き合ってるんですか？」

『そんなわけではないでしょ！！』

思わず声が合わさって言ってしまった。

後輩たちも少し驚いた表情だ。ここはフォローしなくては。

「ああ・・・ごめんな、いやその、付き合ってるわけじゃないんだ。単に仲の良い友達って感じでな。」

「・・・」

「つておい！何で夏希はだまっちゃうの？」

「あつごめん！」

だんだん薄黒い煙が上がっていることに気がついた。

「ああやばい！肉が焦げてる！こら！優也！あんたのせいでしょ！」

「つたくなんで俺が・・・」

「すいません先輩、変な事言ってしまったて・・・」

「いや、いいのよ。気にしないで。なぁんにも気にしてないんだからー！」

そういつてその場の変な空気は終了した。つてかなんであいつは無言になったんだ？俺のことが好き？なぁんてあるわけがない。絶対ない。断じてない。

そんなBBQも終わり後輩達も他の友達のところへ行ってしまったようだ。俺と夏希はアポ取りに失敗してしまい行く当てもない。だから俺たちはそのまま現在の班に残ることにした。

俺は満腹だったのでジュースを飲んでいたが夏希は一体どれくらい

の食い意地を張っていたのだろう。まだ食っている。俺はそんな夏希の食いつぶりワンマンショーを眺めていたのだった。

「なあ夏希、おまえはまだ食うのか？」

「ん？まあまだね。せっかくのBBQだし、アポ取りもだめだったしね。もうこりや食うしかないでしょ！！」

「はあ〜すごいね。まあ俺も美穂さんがだめだったしなあ〜アポ取れていたならどんな展開になっていたんだろうな。」

「そりゃあ神のみぞ知る。もしくは美穂はあんたと話さないであたしと話していたかもよ？」

「まあ同姓だしな。そういうのって基本だよな。」

「もし、ウインスキー君が来てくれたのであればそれは逆の立場なのかもしれないわね。」

「結局はどちらか片方が積極的でないといけない。そういうことか。」

「結論、そうなるわよね。」

そんな反省会みたいな事をしていたらどうやらお客さんが来たようだ。俺達の中に入ろうだなんてよっぽどの物好きなんだろうな。

夜の闇の中で薄暗くて全然見えないけれどBBQセットの前まであるいてきたその人は眼鏡のレンズに反射させ俺達の前にやってきた。俺達の前に来る眼鏡女子なんて決まっている。そう、小夜子だ。

「こんばんわ。こちらに入ってもいいですか？」

「そんなお断り入れる必要なんてないぜ。どうぞどうぞ。」

「ありがとうございます。」

夏希は不機嫌そうな態度で小夜子に話しかける。

「どうしたの？こんなところに。優也とも今日話したそうじゃない。またやってきちゃって。あんた優也の事が好きなの??」

「はい。」

「っ！！！！！　　っておいおい。はい。って・・・」

「はあ！?!?!?あんたマジなわけ!?!」

夏希もさすがに動揺を隠せないようだ。そりゃそうだ冗談で聞いた

のだから。もちろん俺だつて動揺するけどさ。

「えつと・・・お友達ということ。ということなのですが。」

「つて、そつち!?この話の流れからしてどう考えてもLikeじやなくてLoveでしょ!？」

「すみません。でもこの話の流れを理解していた夏希が動揺するということはもしかして優也さんにやきもちでしたか？」

なんだろう。的確な突っ込みだな。しかもいたつて冷静だ。邪険にしていた夏希への反撃なのだろうか?地味に怖い女だな、小夜子。

「な、な、なに言つてんの?そんなわけないじゃない!そんなこと言つならもう来んな!」

「まあまあ。小夜子さんも変にからかわないでね。さすがに来て早々だと夏希も怒つちゃうよ。」

「からかつたつもりではないのですが・・・」

「なによそれ!」

「まあまあ二人とも落ち着いて!」

「・・・ふん!わかつたわよ。」

「ところで小夜子さん、どうしたの?こんなところへ。」

「夏希さんとの親睦を深めようと思ひまして。」

「ふんっ別にいい。」

「おい!そんな言い方はないだろ。」

「別に親睦を深めようと思わない。」

「そうですか・・・」

すごく残念そうな表情で地面を眺めている。この子はきつともつと夏希と親睦を深めたいのだろう。せつかくのルームメイトなんだし。こんなイベントなかなかないものだからな。元々仲の良かった関係ではないからこの子もこの機会を大切にしたいんだろう。けど夏希は全然そんな気はないようだ。ここは仲人をするべきだろうか。ちよつと難しいけど夏希は少し人見知りだしルームメイトとの関係が良くなきゃ学校生活だつてつまらなくなつてしまつたろう。ルームメイトはプライベートも一緒に過ごす関係だからな。

「まあまあ夏希もさ、これから小夜子さんと同じ部屋なんだからさ。今まであんまり接していなかったんだしこれからは仲良くしようって事でいいんじゃないか？」

「ん〜そうだけど・・・」

「なにも悪いことじゃないんだぜ？向こうから手を差し伸べているんだ。おまえはそれを掴むだけなんだ。何も難しいことじゃない。難しいと感じているのであればそれはおまえの人見知りだ。」

「ええ、私も夏希さんと同じルームメイトになったのでこれまで全然接する機会は少なかったですけどこれからは仲良くしていきたいと考えております。だからこのようなイベントを通してせっかくなのですから親睦を深めようと思っております。」

「な？だから夏希。これからは毎日顔を合わす同士だ。仲良くしていこうぜ。」

「・・・わかったわよ。」

「よし、いいぞ！夏希！」

「ありがとうございます。」

夏希は照れているのか顔を少し赤く染め、コクンと頭を下げた。

小夜子さんは実際に手を差し伸ばし握手を要求すると夏希は照れながらもその手を固く結んだ。

お互いアポを取れなくて残念なB B Qになってしまおうかと思っていたがこれはこれで良いB B Qになったわけだ。

夏希はさっそく小夜子さんにわずかな肉と野菜を分けてあげた。元の班で食ってきただろうから腹は満腹だろうけど折角の好意だ。それを笑顔で食べていた。そんなんだか心温まる情景を俺は眺めていた。

「皆様いかがお過ごしでしょうか？本日の寮生フェスティバルもそろそろ大詰め！キャンプファイヤー付近にてフォークダンスを行いますー!!!」

なっ！これは確かパンフレットには載っていない。内容はBBQとキャンプファイヤーだけだったはず。キャンプファイヤーはいつのまにか炎が点灯していたので俺にとっては照明代わりのようなものだったがまさかこんなサプライズがあったなんて・・・
もちろんサプライズなのでそこから中から「えーっ！」やら「キャー！」等といった黄色い声やら聞こえてくる。

「ねえ優也。」

「ん？」

「フォークダンスって何？」

「つておいおい、今まで体育祭とかで踊ったこととかないのか？」

「いや、ないけど・・・」

「んゝなんて言えばいいのか？なんか最後にクルッと一回転するんだ。」

「前方宙返りやら後方宙返りをするわけ！？どんだけアクロバティックなの！？」

「んなわけないだろうが。まあすごい簡単なダンスだからさ。なんならやってみるか？」

「ううゝなんだか緊張する・・・」

「俺でもか？」

「後にウィンスキー君とやると考えるとなんかね・・・身長差かなりあるけど大丈夫かな？」

「身長差なんかよりもおまえの人見知りの方が問題だと思っけどな。」

「うっさいわ！あほ！」

「んじゃ、早速やってみるか！」

フォークダンスは手を繋いだ状態でやるのだが俺なのか夏希なのか手汗で手が少し濡れているように感じがした。まさか俺が夏希の手を繋いだことで手汗をかくわけ・・・ないよな。あいつも・・・ないよな？なんでだろう。気になったが・・・ダンスに支障をきたすためできるだけ気にしないことにした。

「どうだ？結構簡単だろ！？」

「う、うん・・・大丈夫だと思う・・・」

「なんだか心配してるみたいだな。」

「そ、そりゃそうでしょ！まともに話したこともないのにいきなり手を繋いじゃうのよ！？」

「まあそうだよな。俺も緊張するといえはするけど、どちらかといいと楽しみだよな。」

「なんだかあんたの肝っ玉の強さを始めて知ったわ」

「んだよ、それ！」

夏希と手を離して手を見てみるとそこには僅かな手汗が・・・俺なのか？俺は夏希と手を繋いだことに・・・ああっわけわかんねえ！俺は夏希の見ていないところで手をスボンでガツと拭った。

「では、フォークダンスを始めたいと思います。皆さんキャンプファイヤーの周りに集まってください。」

俺と夏希は同じ列にならんだ。と、ここで気づいたのだがフォークダンスとは二列になってやるのだが片方の列だけがローテーションしていく。つまりはもしも万が一ウインスキーや美穂さんが俺達と同じ列にいた場合、一緒にフォークダンスを踊れない！！

正直ここは運だな・・・確率は二分の一か・・・夏希がマジックレヨンで使って描けば理想は現実になるだろうがそれには時間と場所が足りない。前回世話になったし作戦は失敗続きだしここは夏希だけは成功してもらいたいな。もちろん俺も美穂さんとの巡り合わせがあればそれは最高だけどさ。

少しすると愉快的な音楽が流れてきて運命のルーレットが始まった。

「これからよろしく願いしまあす！」

ただダンスをするだけではなくちよつとした挨拶を交わすが本当によろしくするのはきつと少ない可能性だろう・・・しばらくするとチエルがやってきた。

「ああ！優也さん！」

「さっきはありがとうね。助かったよ。」

「良いんです、良いんです。」

「そういえばウインスキーは一緒じゃないの？」

「いつも一緒ってわけじゃないですよ！でもたぶん近くにいると思います・・・兄は心配性ですから」

「ははっ！そうなんだ。」

こいつはちよつとした朗報だな。もしかしたらウインスキーは近くに
いるかもしれない。

そう思って周りを見渡してみると、いた！列としては俺と違う列だ
から俺と夏希とダンスをすることが出来る！

俺は一安心した。二人揃って全滅なんて暗すぎるし何より夏希がま
だ良い思いしてないから何よりもチャンスが巡ってきた事が俺にと
っても嬉しい。夏希は気づいただろうか・・・隣を見てみると上手
くダンスができないらしく途中途中でペアの人と絡みそうになっ
ている。これはダンスに集中していて気づいていない・・・まあ仕方
がない。ここは上手くいけるよう祈ってしよう。
三組ぐらいしてからウインスキーがやってきた。

「ゆうちゃんBBQはごめんなあ！」

「ゆうちゃんって・・・まあいいや。仕方がないよ用事あったんだ
し！」

「ゆうちゃんは優しいなあ！そう言ってくれれば助かるぜ！そんな
やまたな！」

「おう！」

さあ夏希の番だ。夏希は自分のダンスに一杯一杯でウインスキーが
隣にいたのを気づいていないらしく、急にウインスキーが来たので
どぎまぎしている。そんな頭から湯気が出そうな夏希にウインスキ
ーから話しかけてきた。

「こんばんわ。優也の友達だったよね？これからよろしく！」

「えとえと・・・よろしく、お願・・・します・・・」

「おやおや？優也と一緒にの時は元気なのにどうしたあ！？」

「いや・・・そんなことはないです・・・」

「そつか！てつきりお二人付き合ってるかと！ははっ！」

「え！？うわ！」

緊張のあまりウインスキーとのダンスで絡まってしまい少しづつつてしまった。

「ごめんなさいっ！！！」

「ああいいよ、こつちこそごめんな！」

そんな時だった。

「あのう……」

ウインスキーと夏希のやりとりに集中しすぎて自分のダンスを完全に忘れてしまっていた。順番が回ってきた子待たせてしまっていた。

「あ、ごめんな！」

ちよつとあたふたしてしまいその後のやり取りを見ることができなかった。

そして俺のお目当てだった美穂さんは俺と同じ列なのか実行委員なのか順番は来ることはなかった。

でも今回は夏希だけでもって願っていたから俺にはそこまで悲しむ事はなかった。

フォークダンスが終わった後夏希に呼び止められた。人に聞かれたくないのか、人が少なくなってから夏希は口を開いた。

「はぁ緊張した……」

「お疲れさん！よかったな。無事にウインスキーとフォークダンスが踊れて！これで少しは関わりが持てたんじゃないか！？」

「そうね！でも……絡まっちゃって……今思っただけでも恥ずかしい！！！」

「まあ……貴重な経験になったんじゃないか！？」

「そう……かもね。でも次はまともな形で近づけたらな……あのさ！優也……」

「なんだよ？改まっちゃまって。どうした？」

「あのさ、あたし達・・・距離を置かない？」

「はあ???どういうことだ？」

「付き合ってるわけでは無いのにこんな事言うのは意味わからないけど、班でB B Qやった時後輩から付き合ってるんですかって言われちゃったじゃない？さっきウインスキー君にも言われたんだ。それにこんな事を言われるのは初めてじゃない。前にも学校であったのよ。」

「まあ付き合ってるけどな。確かに後輩に言われたなあ。俺は何にも気にしていなかったけど、それに学校でもそういうことを言われたって知らなかったなあ。」

「あたしも元々気にしてなかった。けど後輩やウインスキー君にも言われるって、他人から見たらそう見えてしまうのかなって。それがね、言わないでいるだけで実はそう勘違いしてる人って実は多いんじゃないかなって。もし勘違いが行き過ぎてしまったら、あたし達の恋愛に支障をきたしてしまうんじゃないかなって。」

「こんなに真面目な話をする夏希は初めてだ。少し考え過ぎな気はするがもしも夏希の考えが正しいかった場合やはり支障をきたすかもしれないな。でも友達なのに距離を置くって？」

「夏希の考えはわかった。つまりはお互いの今後を考えてってことだろ？」

「・・・そうね。」

「でも、距離を置くって具体的にどうするんだ？」

「そうね・・・とりあえずあまり関わらない事にしましょう！」

「関わらないねえ・・・」

「じゃ、伝えたい事伝えたからそういうことだっ！」

夏希は言いたいことだけ言って走って去って行った。

俺は一体どうすれば？とりあえず関わらない事が距離を置く事だっというなら関わらないことにするしかないか。

でもなんで夏希と付き合ってるんじゃないかって囁かれてるんだ？単なる友達なのに。それが別に嫌だって言うよりこんなことに発展

することになるのがなんだか遺憾だ。

なんだかモヤモヤした気持ちになりながらグラウンドを後にした。部屋に帰って来るとウィンスキーはシャワーを浴びているようだ。俺は話相手もないので家から持ってきた荷物を片付ける事にした。

優也に距離を置こうなんて言ってみただけど、こんなことするのは普通恋人同士じゃないのか？でも、あたしはこのよくわからない状態になったのを打破したいと思った結論だ。でもこれが正しいかなんてわからない。けどどうにかしないといけないような気がした。今一緒に居る小夜子もあたしと優也が付き合ってるのかな？なんて、思っているのだろうか。

「夏希・・・なんだか顔色悪いわね、どうしたの？」

「・・・いや、なんでもない。」

今日のBBQで打ち解けることができたけども正直まだこの小夜子についてよくわからなく、あたしは相談する事ができない。そもそもこのこんな話は相談相手がいないのだ。美穂に相談するとしても優也と美穂の為に取った行動だ。小夜子は無関係の位置にいる。相談しやすいかもしれないが小夜子についてよくわかっていない為相談ができない。ならば、こんな早くに優也に伝えるべきではなかった？もう少し考えて伝えるべきだった？それについてもわからない。なんだかものすごくモヤモヤする・・・明日から学校どうすればいいのだろう・・・優也とは席は近く毎日のように話して、ふざけていた毎日。二年になってからはそう、優也がいつもいた気がする。でも明日からは接することはできない。どう学校生活を過ごせばいいかわからない・・・

布団の中に潜りこみ布団の端を握り締めたまま、その日はいつの間にか寝てしまっていたのだった。

心の晴れない直球

なぜこんなことに悩まなければならぬのだろう。本当であれば好きな人の事で悩んでいたい。その方が時間の有効活用ができるのだから。それなのに無意識に悩んでしまう。優也が離れてしまうことがあたしにとって不安なのだろうか。でもまだ知り合って数ヶ月。なのになんてこんなにも胸がぼっかり空いた気がするんだろう…

「夏希！ 起きてー！！ 夏希！！」

「ん…んう…」

「夏希！ 朝よ！ 夏希！！」

「ん…朝？」

「昨日はいつの間にか布団で寝ちゃってましたよ。学校に行く前にシャワー浴びなきゃでしょ。だから早く起こしてあげたんですが」「あ…そうなんだ。ごめんね！ じゃ、すぐにシャワー浴びてくるから！」

昨日シャワーに入らないで寝てしまっていたから髪の毛クシャクシャだ。暖かい季節になってきたがまだ早朝は寒い。早く熱いシャワーを浴びなくて仕方がない。シャワーに入るまでのこの時間が一番つらい。

キュッ ジャー…！！！！！！

最初こそは冷たい水が出てきたがすぐに温かいお湯が出てきた。流石は新しい寮。給湯器もバリバリ働いてくれている。

さっきの夢はなんだったんだろう…悩んでいたことしかわからない。昨日優也に距離を置こうなんていったから？ なんだかよくわからない夢だった。モヤモヤした気持ちも昨日の汚れもこのシャワーで全部綺麗に流れて行ってくれたらなあ…そんなうまくいくわけないか…

でも、シャンプーをしているとなんだか少しだけそんなモヤモヤが取れていくような気がした。頭皮を刺激したためか、それともシャ

ンプーの香りが癒しの効果があるのだろうかは知らないが髪の毛を洗うことでここまで気持ちが良いと思っただことは初めてだった。

シャワーを浴び終わって洗面所に出て気がついた。ここは寮で尚且つ持ってきた荷物の準備もをろくにしていなかったためタオルがない。シャンプー剤などは恐らく小夜子のものだろう。気がつかないで使ってしまった。

「ねえ小夜子いる？」

「どうしました？」

「ごめん、あたしの荷物の中にバスタオルがあるんだけどさ持って来てもらえないかな？」

「ええ、わかりました。」

言った後に気がついたが下着もなかったんだ。でもこれはさすがに頼みづらいし…

少しするとドアをノックし、ドアを少し開けその隙間からバスタオルを差し出してくれた。とても気が利いた対応してくれた。

あたしはすぐにバスタオルで体を拭き、バスタオルを体に巻き部屋へと戻った。

「さつきはごめん！ありがとう。」

「いえいえ。」

こんな恥ずかしい格好は長くしていたくはないので、すぐさまバツクの中から下着と着替えを取り出した。

「ちよつと着替えてくるね！」

「あ、夏希。」

「え？なに？」

「下着なんです、上と下が違います。」

「ええっ！！」

顔面赤面。朝から何やってるんだろう…すぐに正しい組み合わせの下着を用意し洗面所へと駆け込んだ。

はあ…朝からバタバタしていて疲れる。学校行く前に部活をしている生徒のような気分だ。

すぐに下着を着け、短パンとTシャツを着た。

「ふう、おまたせ！」

「あれ？ 夏希制服じゃないの？」

「えー!?」

「もう時間ないですよ？」

「ええ〜!!」

まだバタバタしないといけないようだ。すぐさまニーソックスを履き、ブラウスを着てスカート、ジャケットを着用した。髪の毛はまだ濡れていたためタオルをかぶりながら登校することにした。

「はあ… なんだか朝から疲れたわ。」

「前日に準備していくといいですよ。ちゃんとお風呂も入ってね。」

「そうね… 気をつけるわ。」

「ではまた」

「うん！」

夏希と小夜子のクラスは異なり、小夜子と夏希のクラスは離れているため生徒玄関が別になっているため少し早いがここでお別れをすることとなる。

「やつほ！ 夏希！ 昨日は楽しかった!?!」

「あ、美穂お！ 昨日は美穂が居なくて寂しかったよお〜!!」

「おおよしよし！ おや？ 髪の毛濡れてるけどどうしたの？」

「あははっ！ 昨日いつの間にか寝ちゃってね、今日の朝シャワー入ったんだ。色々バタバタしちゃって乾かすのを忘れちゃってさ」

「ふう〜ん。夏希らしいね！」

「なによそれ！ ぶーぶー」

「あ、優也君だよ！ おーい！ おっはよお！」

優也がいる… あたしはどうすればいいのだろう。それにウインスキー君もいるなんて…

「ああおはよう」

優也が美穂の挨拶に反応した。そっか！ あたしはウインスキー君に。優也は美穂に話をすればいいんだ。それでいけば問題ないどこ

るか一番良い！

「おはよう、ウィンスキー君。」

「あ、おっす！　なんか女生徒から挨拶されるなんて気持ちが良いねえ！　へへっ！」

「へへっそうかなあ。昨日のフォークダンスはごめんね。」

「ん？　全然気にしてないぜ。あ、ほら、優也にも挨拶したか？　俺なんか挨拶しないで優也に挨拶しないと！」

この言葉が胸にぐさつときた。なんで？　付き合ってると思ってるの？　別にそんなんじゃないのに…

「いや、そんな挨拶するほどでもないぜ」

優也が話を割ってくれた。確かに元々挨拶を交わすわけでもなかったし、なによりこの状況を打破してくれたのが何より助かった。

「じゃあな！　俺また部活で帰り遅いけどよろしくな！」

「ああまたな！」

三人で歩く廊下道。優也は美穂と話そうとしない。あたしはせっかく美穂と話さないでいるのに何を考えているのだろうか…

気がつくやうに教室についていた。問題はここからどうするかなんだよな…

美穂は机に座ると机の引き出しにキッチンとその日の授業の教科書をしまっていた。あたしはもちろんそんなことはしない。良く言えば忘れ物をしないため、ずっと引き出しの中に教科書は投げ入れている。

優也は体操着のバックを机に置き、枕にして寝るスタンスを取っている。

そんなことばかりしている優也にいつもあたしはちよっかいを出していた。けどそれももうおしまい。そんな事ばかりしているから、恋愛の神様も振り向いてくれないんだ。

そういえば体操着のバックで思い出したけど今日は体育だっけ。体操着も忘れてきちゃったしなんだかやる気も出ないから今日は見学にしよう。本当は体育の授業好きなんだけどなあ…

3限目に入ると天候は悪くなってしまい雨が降ってきた。この時期の体育は男子はグラウンド。女子は体育館というふうになっていたのだが、雨が降ったりした場合はグラウンドを使用することができないので男女共に体育館となる。憂鬱な気持ちだったのに、体育の授業を見学をしているところを見られたら変に心配されてしまう。でも今はお互いに距離を置いているので、接触してくることはないはずだ。

4限目の体育の授業が始まった。着替えの時美穂に「夏希どうしたの？」って言われてしまったけれどもいつものように騒ぐ元気もないあたしを見たら「無理しないでね」と言われたので正直安心した。体調が悪いわけではないけれども、昨日の一件からモヤモヤしていた。

優也はなんで見学をしているのだろうと不思議そうな顔をしていたが、お互い距離を置いているため、やはり接触をしてくることはなかった。

今日はいつもの体育の顧問が不在ということと今回の体育の授業は自習となった。この自習というのがスポーツであれば好きなことをしても良いという内容なんだが、これが一番楽しい授業だ。それなのにあたしは気持ちも晴れなくて、尚且つ見学をしている。なんだかすぐくつまらなく残念な気分だ。いつもならこの楽しい時間を大はしやぎしたいところなのに。

「はあ〜……」

「危ない!!」

「えっ!?!」

「バツシーン!!」

突然のことだった。ため息をついていたら男子がバスケットボールでドッチボールをしていたバスケットボールが夏希の方に飛んできてそれが夏希の頭に直撃をした。

夏希は何が起こったのかわからなく、頭を抱え込んだ状態でそのまま地面に倒れこんだ。

「おいっ！大丈夫かあ！？」

「誰か担架！担架持って来い！」

「夏希、大丈夫！？」

あまりの衝撃的な出来事で他のみんなが慌てて駆け寄ってきた。

「大丈夫。担架なんて要らない。俺が保健室へ連れて行く！」

「でも優也君だけじゃ運べないわ。ここは他の生徒が取りに行つて担架を待ったほうが…」

「それじゃ間に合わない！どこにあるかわからない担架を待つていられない。保健室だろうと病院だろうとどちらにせよ頭を打つたんだ！急がないといけないだろ！夏希ぐらい、俺一人で運べるさ。皆さんは是非授業を続けて下さい。」

そう言つて夏希をお姫様抱っこをし、保健室へと向かうことにした。

「おい、夏希大丈夫か？」

「…」

「くっ喋れない状態か…そりゃ無理もないか、バスケットボールだからな。今保健室へ連れて行くからもう少し辛抱しろよ。」

頭を揺らさないようゆっくりと保健室へと向かった。

ガラガラ

「失礼します！」

「はい。おや、どうしましたか！？」

「体育の授業中バスケットボールが頭に当たったということで運んできました。」

「そうでしたか。ではこちらのベットに寝かせてください。」

「わかりました。」

夏希をベットに寝かせると先生は夏希の頭を触って何かを確かめているようだ。だが素人の俺には何をしているかがわからない。

「村山さんは頭を強打しているのならば早くは保健室に休ませることにします。運んでくれた黒木君。ありがとう。」

「まだどんな状態かわからないんですよね？」

「そうね。まだわからないわね。それにね、頭ってすごく繊細なのだからもしであれば病院に連れて行ったほうが確実かもしれないわね。」

病院だと…そんなに重症だったのかよ。今までだとこういう時よく一緒に遊んだりしていたが何で今日になってまた見学なんて…なんでだよ…らしくねえよ。まったく。

「う…うん……」

「な、夏希？ せんせーい！ 夏希が目を覚ましました！」

「しーっ。保健室では静かにね」

「すみません。と頭をぺこっと下げた。」

「どれどれ。村山さん大丈夫？」

「…はい」

「頭痛い？」

「うーん…なんか痛いというよりぼやあっとした感じがします。」

「そう、何もなければいいんだけど。とりあえず安静にしていってね。」

「はい。」

先生はカーテンを閉めて出て行った。

「なあ夏希大丈夫か？ なんでおまえ見学なんかしてるんだよ。具合悪いのかよ。」

「いや、体操着忘れて・・・」

「なんだよそりゃー。なんなら俺が貸してやったのに。」

「サイズ違うし。それに、あたし達距離を置いてる関係なのよ？」

「ああそうだったよな。すまん。」

「いいわ。保健室まで運んでくれてありがとうね」

「ああ」

キーンコーンカーンコーン

どうやら授業が終わったようだ。

「なあ夏希、腹減ってるか？ その状態だと学食に行けないよな。」

なんなら俺が持つてきてやろうか？」

「いい。遠慮しておく。」

「なんだよ。距離を置いてるからか？」

「それもあるけど…食欲がない。」

「そうか。なあ…距離を置くの辞めないか？ 距離を置いたばかりだけだよ」

「別にあんたのことが嫌いだから距離を置いてるわけじゃないわ。単にお互いのためよ」

「それはわかるけどさ…なんか友達なのに友達として一緒に入れないのがなんだか切ないんだ」

「それもそうね…でも距離を置いたのはまだ一日もたってないのよ。もう少し待ちましょう」

「そうか。わかった。じゃあ安静にしてろよ」

「わかつてるわよ。」

ガラガラ…ガタン…

優也があたしを助けてくれた…なんで？ 距離を置いてるのに。そんな人が見ている前じゃ明らかに付き合ってるみたいじゃない。でも助けてくれた優也を責める事はできない。むしろ感謝しなければならぬ。あたしがぶつかってる事がそもそも原因なんだ。なんであんなボールぐらい避けられなかったんだろう。むしろ気づけなかったんだろう。モヤモヤしていたのが原因なのかな。だったらこんな距離を置くとか辞めてしまえばいいんじゃないのか。あたしはきつと優也が距離を置くのを辞めようと言ってくれた時内心嬉しかったんだ。でもそれを拒否した。あたしは意地っ張りだ。こんな距離を置くことで何かが変わると確信しているわけではない。むしろこんなことでモヤモヤしてしまっている。もし、しばらくしても優也が距離を置くのを辞めようと言ってくれなかったら？ あたしからそれが言えるのか？

ガラガラ…

また保健室に誰かが来たようだ。

「優也っ！」

「よっ！ 食欲る？ 購買部からゼリー飲料買ってきてやったからこれ飲めよ」

「なんで？ あたし頼んでないわよ！」

「可愛げがないやつ。いつも大食漢なおまえが何も食わないなんて不気味な事言ってたから気を利かして買ってきたのによ。まあ飲まなくてもいいから受け取ってくれ。そんじゃな！」

「…ありがとう！」

優也はこんな優しいやつだったんだ。考えてみればそうだ。ハンカチの作戦だったり豆乳もよく買ってくれるし、あたしがジューズ溢した時にも拭いてくれるし、ダンスの踊り方だつてレクチャーしてくれるし。そして、今日みたいに保健室に運んでくれたり…そんな人といつも一緒にいたからなのかな…付き合ってるって誤解されるのは。なんでもかんでも優也がいてくれてサポートしてくれるから傍からいなくなって寂しいとを感じるのか。

あたしは強くならなければいけない。今まで優也のサポートばかりを受けてきた。けど、本当の勝負はあたししかできない。だからしっかりとウィンスキー君へ気持ちを伝える。いつも喋れなくてきつと印象が薄いであろうあたしと付き合ってくれるなんて思わない。でも好きって気持ちをウィンスキー君に伝えたい。そしてあたしの強さを自分自身に証明したい。クレヨンで人の感情を左右することはしない。けど、作戦決行の為に使用する。

久々にラインストーンを散りばめたデコレーションしたクレヨンの箱を眺めた。そういえばいつから描いてなかったんだろう…毎日の生活に満足していたからかな。久々に描くから上手く描けるかわからないけど…描こう。

まず、気持ちを伝えるには会わなくてはならない。でもクラスも違うし、部活してるし…そうだ。部活中に会うことにしよう。

ウィンスキー君は部活メンバーとキャッチボールをしている。けどそれを部活メンバーが暴投してしまう。校舎側のほうにボールを捜

しに行つた先にあたしがいる。そこで少しだけ時間を割いてもらつてあたしの気持ちを伝える。これでよし。後は緊張せずちゃんと話すことが大事だ。

キーンコーンカーンコーン…

とうとう下校時刻になったか。結局ずっと保健室にいた。けど、腹は決まった。勇気だつて出せる。よし、行こう。

「先生、ありがとうございます。」

「村山さん、大丈夫？ また少しでも悪くなつたら言つてね。もし、寮にいる時具合が悪くなつたら寮事務に伝えて。一樣寮の保健室の先生もいるから」

「はい。わかりました」

起きてみてわかつたけど少し頭がくらくらする。でも気持ちを伝えることは辞めない。とりあえず野球部の練習場の校舎側のところで待機だ。ちょうどキャッチボールが始まったみたいだ。あとは絵に描いたとおり暴投してこつちに飛んでくれるのを待つのみ。

5分ぐらいするとチームメイトの一人が暴投をし、ウィンスキーがそれを取りに行く。校舎側までウィンスキーはやってきた。

「あ、ども！」

「ども！」

「あのさ、この辺でボール転がってきてないかな？」

「ボール？ これのこと？」

転がってきたボールをあたしは先に取っていた。

「ああ、それぞれ。サンキュー！」

「じゃあ…受け止めて！」

「ん？」

「あたしは…ウィンスキー君が好き！ 最初に見かけた時からずっと好きだったの！ 話しかけてくれた時、ダンスしてくれた時、ウ

インスキー君と関わった事が凄く凄く幸せだった！ でも、あたしはウインスキー君にとって印象が薄かったと思う。関わりも少なかったからウインスキー君が彼女居るのかも知らない。けど今こうして告白してるのはあたしの気持ちを知ってもらいたいからなの！」
持っているボールをウインスキー君に思いっきり投げた。気持ちを乗せて。

バツシンツッ！！

「良い球してるなあ！ ありがとう。気持ちは確かに受け取ったよ。俺はてつきり優也と付き合ってるかと思ってたよ。ごめん。俺は別に彼女はいいよ。けど、君の気持ちを受けすることはできない。それは好きな人が居るとかではないんだ。それに君のことが嫌いだってわけじゃない。俺には妹がいるんだ。その妹が立派な大人になるまでは俺がずっと傍にいたい。守ってあげたいんだ！ だから俺は他の女性を好きになつて傍にいたいと思えないんだ。けど、妹が悪いわけじゃない！ これは兄である俺の勝手な都合なんだ。だから妹を恨んだりとかはしないで欲しい！ 気持ちは凄く嬉しかったありがとう。けど、気持ちに答える事ができなくてごめん！」
「いいの！ 付き合えなくても後悔はない。あたしは…あたしの気持ちをしっかり伝えたい。それだけだったんだ。あたしのわがままに部活の時間を割いてしまつてごめんね。」

「いや、いいんだ。こちらこそごめん」

「ううん。いいの。ありがとう」

「じゃあ俺はこれで！」

「じゃあ、またね！」

ウインスキーは走って練習場へと戻っていった。

そっか…だめか…でも彼女が居るとかじゃなくなって大事な妹さんの為か…なんだか妬けちゃうなあ。でも、ウインスキー君も真っ直ぐな人で良かった。あまり人として知ることではできなかったけど好きになれて良かった…

あ…あれ…目が熱い…涙？ どうして泣いちゃうんだろう…あたし

自身滅多に泣かない人間なのに…どうして…？

「あれ？ 夏希？」

「まずい。自分の知ってる人に見つかったようだ。泣いてるなんて恥ずかしいところは見せられないし、どうしよう…」

「…夏希？」

「え！ あ、その…」

「美穂だった。なんでこんなところに美穂が居るのかわからない。でも泣いてるところなんて見せたくなかった。袖で涙ぐんだ目を拭いた。」

「ご、ごめんね！ どうしたのかな？ なんで美穂がこんなところに？ 珍しいじゃない」

「昨日のBBQの後片付けだね。それより具合悪くない？大丈夫？」

「へーき平気！ 見ての通りこんなにピンピンしてる！」

「…なんだか、今日の夏希…おかしいよ」

「…ふえ！？」

「いつつも体育の時間楽しみにしてるでしょ？ それなのに見学をしていた。それに今日はいつもとなんだか違った。」

「えとえと、それは今日の朝シャワー浴びたりしてて、体操着を寮に忘れちゃっただけなの。でもいつもと違っただって？」

「いつもの夏希なら長袖でもいいから持ってない？ とか聞きそうだけどなあ。滅多に忘れてくることなんてないからわからないけどさあ。なんか浮かない顔、してるよね。」

「そ、そんな迷惑になること…しないよ。浮かないって？」

「夏希…目が赤いよ？ もしかして泣いてたの？」

「え…」

「何かに悩んでたんでしょ？ なら相談してよ！ 私達友達でしょ？ そうでしょ？ 友達ならつらい時、悲しい時相談してよ！ 夏希は割と自分で決めることができると思いよ。でも行き詰ったり迷ったりしていたんでしょ？ それなら友達である、私に相談してよ！」

「…美穂」

「私はね、そんなつらい時に頼ってくれないのが凄く切ないよ。頼られない私自身、切ないよ…」

「ごめんね…」

「泣いていたのは、もしかして、事が済んだ後だった？」

「…うん」

「じゃあさ、私は今回相談に乗れなかった。せめて慰めさせてよ、ね、夏希？」

「…うん」

あたしは優也との距離を置くということは優也と美穂の為でもあるから伝えることはできなかった。けれどもウインスキー君の事が好きで、たった先程告白をしたことを伝えた。

「そっか、残念だったね。夏希。」

「うん…でも、あたしは気持ちが悪えられただけでも十分。話を聞いてくれただけでも満足だよ。」

「そっか…それならよかった。」

「でも、好きだからこそ、泣けてくる…えぐ…グスンツ…本当は涙なんて流したくないのに…」

「いいんだよ。泣いて。悪いことじゃないんだしさ。それに今なら誰も見てないよ。私も見ない。だからね泣いていいんだよ。」

「ッグスン…みほお…」

美穂は優しく抱きしめてくれて頭を撫でてくれた。そんな優しさがとても嬉しくて、優しく、友達の大切さに今更ながら強く感じたのだった。

美穂とお別れをしてからあたしは寮に向かっていった。

もう十分泣いた。だから心の整理ができた。もうウインスキー君の事が好きな気持ち綺麗さっぱりなくなっていたわけじゃないけれどもせめてウインスキー君とは友達でいたいと思った。

今になってふと思い出した。優也は人の心をクレヨンでコントロールするなって。あの時止めてくれなかったらきつと、自分勝手にウインスキー君を振り回していただけだったんだろうな…

寮の玄関を開け下駄箱に靴を入れた。小夜子はもう部屋にいるみたいだ。あたしは小夜子に相談しよう。美穂は友達に相談する大切さを教えてくれた。小夜子とは話すようになってまだまだ間もないけれどこれからは同じ部屋だ。だから相談しよう。優也との距離を置く必要性を。

「ただいまあ」

「おかえりなさい。さつき寮に戻る時に寮事務の方から聞いたんですが頭を強く打ったとか…具合はいかがですか？」

「そうなんだ。具合は今のところ大丈夫かな。」

「それならよかったです。あまり無理はしないでくださいね。」

「ありがとう。ところでさ、相談があるんだけど」

「はい。いいですよ。」

小夜子に優也と美穂。そしてあたしとウインスキー君の為距離を置いたということの説明した。

「なるほど。お互いの為ということですか。」

「そうなの。でもこれって正しいことなのかな？」

「夏希は…どう思いますか？」

「あたしとしては元々嫌よ。たかだか人の思い込みの為にこちらの行動を変えるのは。けどその思わせぶりなのがお互いの恋に影響が出るのがまずいと思ったから取ってみた策なのよ」

「なるほど…なんだか夏希らしくないですね」

「どういうこと!？」

「まあまあ落ち着いて」

小夜子はあまり多くを語らない。そのせいなのか、しっかり最後まで聞かないことには何が言いたいのかわからない。できればまとめ

て一気に喋って欲しいけど、さすがに相談を受けてもらっている身だ。そんな事は言えないのでしっぴかり最後まで聞こう。

「あ、ごめんごめん」

「なんだか、夏希はまっすぐなところがあるので、そういった周りの意見とかそういうのに振り回されないような方だと思っていたのですが…」

「ん〜そうなのかしら。あたし自身自分がどんな人間なのかわかってないから」

「人間皆そんなもんですよ」

「あたしは…お互いの為だと思って取った行動だから…正しいと思いたい。でも、今回あたしはウインスキー君に気持ちを伝えた。だから、お互いではなくなつた。じゃあ…優也に直接どうするか聞いてみるしかないか」

「それがいいかもしれませんね」

えっ？どうして…ウインスキー君に気持ちを伝えたことを言っても何も反応がないのだろう…興味がない…わけではない。と思う。

「あのさ、話変わるんだけど、あたしがウインスキー君に気持ちを伝えたのって興味なかったかな？　なんだか反応がなかったからさ」

「……えと、それはですね…」

なぜだろう。小夜子の口が重い。あたしがはつきり言い過ぎたのだろうか…

「ごめんね」

「いえ、大丈夫です。そうですね、こうやって夏希と仲良くなれ、相談相手にもなれたので、私の方からも大切なお話をさせていたただいてもよろしいですか？」

「大切な話？」

「はい。聞いたらきつと驚いたり、信じられないことも多々あるでしょうが、ゆっくりでもいい。しっかり聞いていただきたいのです。」

「なんだか、緊張しちゃうわね…」

「そんなに肩肘を張らないでください。今伝えられることは僅かです。僅かにはなるんですが夏希と仲良くなれたら、このことは打ち明けたいと思っていました。」

「そうなの？　じゃあ今度はあたしが聞き役ってわけね！　あんまり頼りないって思わないでよ？　しっかり恋愛相談受けてあげるんだからっ！！」

「あ……いえ、恋愛相談ではないのですよ」

「え、違うの！？」

「はい……」

「一体どんな大切な話なのだろう……小夜子の恋愛相談じゃないとしたら……なにも予想がつかない。」

でも、あたしの話もしっかり聞いてくれた。あたしもすっかり聞こう。僅かだって言うけれども、僅かでもあたしに心を開いたからにはしっかり受け止めよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5005s/>

クレヨンに願いよ

2011年12月11日03時58分発行